
俺と吸血鬼の非日常

兎鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と吸血鬼の非日常

【Nコード】

N1879V

【作者名】

兎鬼

【あらすじ】

ある日現れた吸血鬼の少女、人々が吸血鬼を忘れつつある今それは姿を現した。そしてその吸血鬼を狙う者達——魔術師、妖怪、そして、神——

天野 輝也は少女を守る決意をする。

『一章 吸血鬼』（前書き）

文章がおかしかったりしたら教えてください

『一章 吸血鬼』

天野^{アマノ} 輝也^{テルヤ}は暇をしていた。

何せこうも何事もないとつまらないのである。

ゲームだって単調な行動が続けば飽きてくる、そんな感じだ。

「あーあ、なんか《非日常》でもふりかからねえかな・・・」

どこぞの女子高生でもない限りそんな非日常は来ない。

そんなことを思っていた。

その日の夜、ガンガンと窓を叩く音がする。

今日はそんなに風は強くないはずだ。

恵家は不思議に思い、カーテンを開ける。

「ひっ・・・」

それを見て輝也は悲鳴を上げる。

窓には白い手が張り付き、窓を叩いているのだ。

しかし、恐怖よりその得体の知れないものへの好奇心により輝也は窓を開けた。

するとヒョコ、と下から一人の少女が顔を出す。

「静かに！」

少女はそう言うのと窓を乗り越え、部屋に入ってくる。

窓とカーテンを閉め、息を潜める。

輝也是そんな少女をぽかんと見ていた。

羽が背中から生え、服はふりふりなドレスを来ている。

割りと可愛い顔つきだ、年齢は・・・中学生と言ったところか？

勝手に分析していると

ピンポン

自宅のインターホンが押される

「あ・・・いい！？絶対に『いない』って答えてね！？」

ヒソヒソと少女が命令する、何が来たのだろう。

輝也是一応警戒し、玄関を開ける。

そこには身長が高い男がいた。

スーツを来ている、セールスか？

「夜分にすみません。こちらに小さな女の子は来ませんでしたか？」

嫌に低い声で男はいう。

恐らくあの少女だろう。

「いえ、いませんが・・・」

言われた通りに嘘を付く、いや、付かざるを負えない。

男の目には殺意しか宿っていなかった。

「そうですか、失礼しました」

そう言うと男は暗闇へと消えていった

「行ったか・・・」

足が震える、怖かった。
情けないが本音だ。

「ねえ、行った？」

少女がこっそりと顔を出して聞く。

「ああ、言った、しかしなんなんだ？」

ガチャリ、と玄関の鍵を閉め、リビングの電気を点け、テーブルに座る

「あの男は・・・」

思い切って聞いてみた

「あれは・・・」

少女は暫く悩み

「あの男はヴァンパイアハンター。なの」

ヴァンパイアハンター、それぐらいは知っている、いやそれよりも

「え、だとすると君は吸血鬼？」

少女は頷く

「えっと、ポマード」

「それ違う」しまった間違えた

「何か証拠を・・・まあその羽は本物っぽいけど・・・」

「じゃ、じゃあ・・・」

少女は目を閉じる。

バサア！

そのときだ、少女の体が無数のコウモリになり、リビングを飛び回る。

俺が唾然としているとコウモリは椅子の上に集まると少女へと戻った。

「・・・信じてくれた？」

「あ、ああ・・・」

信じるしかないだろう、しかし吸血鬼なんて吸血鬼なんて・・・最高じゃないか！

何を隠そう俺は吸血鬼が大好きだ、ゲームや漫画で見て惚れたが最近は吸血鬼っ娘にもハマっていた。

そしてこの状況、喜ばないでどうする？

「どうしたの？ニヤニヤして」

ついニヤついていたようだ

「いや、何でもない」

すぐに冷静さを装う

「ところでこれからどうするんだ？」

「暫くここに住もうかなー」

「はい？」

「ダメ？」

「いいや！ダメじゃない！全然いいよ！」

「う、うん。ありがと、日の国の人親切だって噂ほんとだね」

「あ、ああ。日本は初めてか？」

「うん、必死で逃げてたらここに着いたの」

「そうだったのか、大変だったな」

「うん・・・それ、で・・・」

こくり、こくりと船を漕ぎ始めた

そしてカクンと首を下に向けるとそのまま寝たようだ

「そんなに疲れていたのか」

俺は彼女を抱っこするとベッドに寝かせ、自分は床に寝た

『二章 吸血鬼がいる生活』

翌朝、俺は床に寝ていた。

何故ベッドで寝ていないのかとベッドを調べると

そこには可愛らしい寝顔で眠る天使のような吸血鬼がいた

ああ、そうか。あれは夢ではなかったのか。

そう思うと嬉しいようなこの得体の知れない吸血鬼への恐怖という
かよくわからない感情が混ざり合い輝也を悩ませる。

取り合えず朝食を作るために台所へ向かう。

両親は相変わらず海外出張だ、寂しくは・・・無い、たぶん。

いや、寂しいわけがない、なんせあの吸血鬼っ娘がいるのだから。

ああ、これでリビングで一人テレビを観ながらの夕飯は終わるのか、
そう思うとなんだか嬉しさから涙が・・・

「つといけね」

思わず目玉焼きを焦がすところだった。

輝也は上手に目玉焼きを皿に乗せる。

「・・・吸血鬼って目玉焼き食うのか？」

疑問に思ったが吸血鬼も生物である以上血だけでは栄養が足りない
だろう、鉄分には困らなそうだが

そんなことで輝也は二枚目の目玉焼きを焼き始めた

「うわ、双子の卵だ」

悔しいがこれはあの吸血鬼の分だ

「・・・ん」

私は自然に目が覚めた、ベッドの懐かしい感触が分かる。

見慣れない部屋、確か私は日の国に来て、そこに住む人の家に・・・

「あまり覚えてないや」

なんせ疲れていた、昨晚の記憶が抜けているようだ。

下からいい匂いがする。

私は下に降りてみた、すると少年がテーブルに料理を並べていた。

「あ、おはよう！目玉焼き食べる？」

私は頷いた、私は朝に弱い。寝起きはあまり話したくはないのだ。

椅子に座ると見慣れない棒が二本。

これが噂に聞く箸と言うものではないだろうか。

突く、割く、掴む。たった二本の棒でこれまで機能する不思議な食器、使いこなすのは難しいようだけど。

私はその箸をじっと見つめていたのだろう、少年は慌てた様子でナイフとフォークを持ってきた。

「・・・ありがとう」

まだ頭がぼうつとする、この少年は確か私を匿ってくれた・・・

「美味しい・・・かな？」

少年が不安げに聞いてくる

「う、うん！美味しい！」

「いや、その何もつけないで食べる人は初めてで・・・」

少年の皿を見ると黒い液体がかかっている、調味料だろう、何かは知らない

「あ、何かける。醤油？マヨネーズ？」

「しょ、しょうゆ・・・」

初めて耳にする調味料だ。

少年は黒い液体の入った瓶を手にとると私の料理にかけた。
いい匂いがする

私はその目玉焼きを食べた。美味しい。

いつもは何を食べていただろう、血ばかり吸い、人を喰らっていたはずだ。

ああ、あの方は今何をしているのだろう。

——
そう言えば日本は初めてだと言っていた、なのに箸を出してしまったときはひやひやしたよ。

俺は朝食を食べ終わると食器を片付け、二階に上がる

暫くして少女も俺の部屋に来る

「・・・あの、昨晚はありがとうございました」

「ああ、いやいや」

いや照れる、しかし可愛い

「あの！私になにか出来ることがあれば・・・！」

そこにいるだけで十分だよ。なんてこと言えば黒歴史に即追加される

「いやいや、ゆっくりしてってくれ」

「うー・・・でも・・・」

悩む姿すら愛らしい。やべ、今の俺かなりキモいかもな
しかし彼女は何かしてやりたいようだ

『三章 吸血鬼とお出掛け』

「あ、そうだ。買い物に行こうか」

「買い物ですか、この辺りに市場なんてありましたっけ？」

「あー、市場じゃなくてスーパーだな」

「スーパー・・・？」

「ま、行ってみればわかる」

早速仕度をして外に出ようとしたときだ

「あー・・・そういや吸血鬼は日光ダメだったな」

物置から母が使っていた日傘を取り出し、吸血鬼に渡す

「それにこのドレスは目立つな、それしか服はないの？」

「え、ええ・・・これしか」

参ったな、俺には妹も姉もない、服なんて・・・

「あ、そうだ」

俺は吸血鬼を連れて家のすぐ裏にある山に登る

暫く登ると見慣れた人物がいた

ここは“鶴野神社”、そこで何か踊っているのは幼馴染みの鶴野ツルノ清香キョウカだ

「おい、何してる」

「舞いの練習だよ、婆ちゃんに認めてもらうためにね」

いやそれは格闘ゲームに出てくるヨガの人の躍りでは？と言いたかったがいつもこんな感じなので放っておいた

「む、可愛いお嬢さんを連れて、何か用？」

「ああ、こいつに着せたい服があつてさ、いらぬ服があれば貰いたいんだが」

「なるほど、あい分かった、暫し待て」

そういうと清香は社の隣にある家に戻り、暫くして段ボールを抱えて戻ってきた

「ほら！服だよ！サイズは大丈夫かな？」

「ああ、ありがとう。助かった」

吸血鬼が物珍しげに段ボールに入った服を見ている

「あ、私が着せてあげるね」

そういうと吸血鬼の腕を引っ張り、家へまた戻る。

そう言えばまだあの吸血鬼の名前を聞いていないな
暫くして二人は戻ってきた。吸血鬼には水色の可愛いワンピースが着せられていた。

「驚いたよ、偽物かと思ったら本物の羽だなんてね」

ついでに吸血鬼であることがバレた。

「申し訳ないが妖怪はNG・・・なんて言わないよ。婆ちゃんじゃないしね」

巫女でありながら妖怪を見逃す、そんな彼女のご慈悲をいただいた

「あ、服はちゃんと羽の部分を切ったからね」

そこまでしてくれた清香に感謝をする。今度飯を作ろう。

「あ、そうだ」

清香が俺を呼び止める

「私ちよつとの間旅行するから不在になるわ」

「ああ、分かった」

そう言う俺たちは山を降り、スーパーを目指した。そして、気が狂いそうな猛暑のなか、スーパーに辿り着く。吸血鬼はスーパーを見上げ

「わぁ！大きなお城！」

などと言っている、しかし彼女が住んでいた場所にはスーパーもないのか？今の時代そんなところはどこか寂れた村だろう。スーパーをお城と表現する辺りお城は存在するようだが

「こらこら、走るなよ」

「凄い凄い！早い！」

車を見てはしゃぐ姿は何とも愛らしい、いや和んでる暇はない

「危ないって！轢かれるだろ！」

俺は吸血鬼の手を引っ張り、こちらに寄せる

「ごめんなさい」

と吸血鬼はシュンとする

「まあ無事でよかったな、さ、中に入る」

そう言うのと自動ドアを潜り、店内に入る

自動ドアにも驚いていた、可愛らしい。店内の人々はこの吸血鬼をジロジロ見ている、まあ羽が見えているから仕方ないか。だが他人からしたら何かのコスプレ程度にしか見えないので気にしない。

「まずは野菜と肉だな」

精肉コーナーまで足を運ぶと吸血鬼は珍しげに豚肉やらを眺めている

「これは・・・人間なのか！？人間も人間を食べるの！？」

大声でトンでもないことを言う吸血鬼、そうか、吸血鬼にとって人間は捕食の対象か

「バカッ！静かにしろ！」

あーあ、周りから変な目で見られてるよ。恥ずかしさに顔を赤らめていると

「あれ？輝也じゃん」

俺の名前を呼ぶ声がしたので振り返ってみると、そこには友人の夜^ス須^{ケイヤ}圭也がいた

「可愛いお嬢ちゃんを連れて・・・いつの間に彼女が出来たんだ？」

「そ、そんな！彼女とかじゃ」

「ふふふ、またまた、変な羽なんて付けて、何かのコスプレか？」

「いや、これは・・・」

・
彼女は吸血鬼だ。とは言えない、第一言っても信用してくれるか・

「ま、いいやわな！んじゃ俺は帰るわ！」

そう言うとき圭也は人混みのなかに消えていった。適当に豚肉にを取

るとカゴに入れ、次は野菜コーナーへと向かう。

「わぁ！野菜がたくさん！」

野菜コーナーなのだから当たり前だろう、と言いたところだが彼女にとっては初めてのスーパーだ、黙っておこう。

「よう、輝也」

突然背後から声がして、ビクツとなる。早まる鼓動を押さえながら振り替えるとそこには友人である江野^{エノ}海^{カイ}がいた。そのがっしりした体型に関わらず気配を消して背後に立たれると正直怖い、何度かストーリーカーに間違えられたこともあるそうなの。

「なんだその可愛らしい彼女は、羨ましいな」

ゆっくりと話す、彼はこんな感じだ。ふと吸血鬼に目をやると野菜コーナーの隣にある惣菜を見ていた。

「いやいや、彼女なんかじゃ」

「ふっ、そうか。それはそうと圭也を知らないか？はぐれてしまっ
てね」

「圭也？圭也なら精肉コーナーで会ったよ」

「そうか、ありがとう」

そう言うと海は精肉コーナーへと向かった、相変わらずの威圧感である。

「おーい！迷子になるなよ！？」

俺は吸血鬼を呼び、野菜を取りカゴに入れるとレジへ向かい、会計を済ませ家に帰ることにした。

「今日は楽しかったです！」

帰り道、吸血鬼は満面の笑みを浮かべて言う

「そう言えばお前は家族とかいるのか？」

「・・・お姉ちゃんが一人、いたけど・・・今ははぐれちゃって」

シュンとした顔を見て輝也はすぐに謝った。

「でもよかったですよ、お姉ちゃんがなくて」

「え？なんで？」

「お姉ちゃんは私が人間と遊んでいると殺しちゃうもん」

「誰を・・・？」

「人間」

今、お姉ちゃんがなくてよかったと思う

「そっか、そんなに人間が嫌いか」

なんだか悲しい気もするな、やはり食料程度に見られてるのか

「ううん、嫌ってるんじゃないくて焼きもちだと思う」

これはまた嫉妬深い姉なこと。そうしていると自宅の前に着く、ああそうだ、また忘れるところだ

「なあ、お前の名前はなんなんだ？」

一番聞きたかった質問をぶつけてみた

「私の名前？ 私は・・・《ユナ》」

「ユナか、いい名前だ」

「ありがと・・・」

ユナは少し頬を赤らめた。

「さ、家に入ろ。肉がダメになる」

『四章 吸血鬼と宿泊』

あれから何日かが経ちまして、一通の手紙が届きました。手紙は圭也からで別荘の屋敷に泊まらないかとお誘いだった、金持ちめ。いい忘れていたが今は夏休み、こう言うのもいいだろうと言うことで泊まることにした。もしまだ旅行に行っていないのなら清香を誘おうと神社まで行ったが

「おや、輝也！清香を知らんかね？」

清香のお婆ちゃんが聞く、どうやら先日から清香の姿が無いらしい

「あんのバカ孫め、家出なんぞしおって」

ぶつぶつと言いながらも探す、よほど心配なのだろう。

俺も探していると社の戸が開いていることに気がついた、戸の前には錠前が落ちてある、随分と前から使われている錠前なので錆びており石か何か硬い物で叩かれたのか壊れている。

恐る恐るなかに入ってみるとまず目に入ったのは御神鏡、倒れてしまっている。

俺はその鏡を起こし、他に何かないかと見渡すが何も盗られたものも無さそうなので社を出た

「清香はいたかえ！？」

お婆ちゃんと合流した俺は横に首を振る、お婆ちゃんは肩をがっくり落とし、ため息をつく

「あ、社の錠前が・・・」

俺は壊れた錠前をお婆ちゃんに渡した。するとその錠前を見てお婆ちゃんは笑いだした

「なるほど！流石は孫じゃ！考えが同じじゃのう」

「あの、何か分かったんですか？」

「ああ、分かったとも。ただ教えるわけにはいかんのう。そうだ、鶴野神社の神主になれば――」

このお婆ちゃんは大変俺のことを気に入っており、次期神主にすると言って聞かないのだ。何でも若い頃の爺さんに似ているんだと。

俺はまあ考えておきます。と言いつ、神社をあとにした。しかし清香がいないとなると・・・まあいいか。ユナと行こう。

自宅に着くやいなや俺はユナに泊まることを伝えた。ユナは喜んで承諾、準備を始める。
まだ早いと思うが。

しかしユナは可愛いな、綺麗な金色の髪、夕日のように綺麗な紅い瞳・・・

「あの・・・何か？」

ハッと気がつく、どうやら見とれていたらしい

「な、何でもないよ！ただ、楽しそうだなと」

「楽しみですよ！久しぶりですもの、こんなこと」

「そうか、久しぶりか。そう言えばどこから来たんだ？」

それを聞くとユナは黙り込み、悩ましげに頭を抱える

「あ、言いたくないのならいいよ」

「じゃ、じゃあそうします」

言えないことか、何だろうな。悩んでも仕方ないが

暫くして、昼頃になる。セミはさらに鳴き始め、夏を思わせる、俺は素麺を茹でると氷水の入った器に入れ、テーブルに並べる。ユナは珍しげに素麺を食べる、箸の扱いにも慣れたようだ。

「あの――」

ユナが突然話しかけてくる

「ん、なんだ」

「その・・・やっぱり吸血鬼って評判悪いんでしょうか・・・」

何を突然、となったが答える

「今じゃあ吸血鬼なんて知ってる人なんてそうそういないよ・・・」

せいぜいマント羽織ったああいうのしか知らないだろう、ましてや

このような可愛らしい娘が吸血鬼とは夢にも思えない

「そうなんですか・・・あまり知られてないんですか」

「いや、知られてないっつーか忘れられてる」

「わ、忘れられてる!？」

「ああ」

「そこまで吸血鬼は数が減ったのね・・・」

とぶつぶつ呟き始める、昔は多かったのだろうか？

そんな会話を終わると食事も終わる、ユナはテレビに夢中になっている間、俺は二階に上がり、勉強を少しするとまだクリアしてないゲームを始めた。

約一時間、ゲームオーバーになったところで心が折れ、ゲームをやめる。そろそろよい頃合いなので宿泊の用意をし始める

しかし、突然泊まらないかとはどう言った風の吹き回しだろう。また良からぬことを企んでいるのではないかと輝也は不安になったが承諾した以上、断るのも気が引ける。ユナは昼にやってるドロドロの愛憎劇ドラマを観ている。やれ、あんな恐ろしいものをどうして女性は夢中になれるのか。と、そんなことを考えているうちに用意は出来た、ここで俺は何時、そちらに向かえばよいのかとメールで聞いてみると16時に来てくれとのこと、今は15時、あと一時間は猶予がある。が、そろそろ出よう、俺はユナにそろそろ向かうことを伝えたと家をあとにした

『五章 吸血鬼と魔女』

あれから圭也の家に着いた訳なのだが。

「あの山の上にある別荘に泊まるんだよ」

と金持ちアピールしてきたのでその山を登り始める、しかし山は暗くなれば何も見えなくなる、危ない

「懐中電灯は？ まあまだ明るいからいいけど」

「忘れた、さっさと登ろう」

「しかし彼女を連れてくるなんてねえー。清香は？」

「知らねーよ、どっか行った」

「ああそうか、浮気されたから逃げたか」

「浮気！？ なんでだよ！」

「くくっ顔真っ赤にして」

「なんだよ！」

そんな会話をしてるうちに別荘の館が見えた、その館に入るとすでに電気が点いていて明るい。すると中から一人の少女が現れる

「あ、輝也だ！ なに？ あんたもお泊まり会？」

それは友人の桜花^{オウカ} 咲也^{サクヤ}だった。

「ああ、そうみたいだ」

「その隣の可愛い娘は誰？」

「ああ、こいつはユナって言ってな。なんやかんやで俺んちにいる」

「へー、ユナちゃんか」

彼女はユナを人形のように抱えるとそのまま奥へ消えた

「ま、上がりなよ。言っておくがゴムは付けろよ？」

「うっせー！なんでそこで！」

「あーくそっ！強い！」

俺たちはいま、ゲームをして遊んでいる。四人で戦い相手を場外へ吹っ飛ばすゲームだ。

「へへん！ネタキャラ扱いされても俺が使えばつよ——」

今度はユナが使用しているキャラが圭也のキャラを吹っ飛ばした。割りと容赦のない娘である。

「まさか貴女と一騎討ちなんてね！」

咲也は燃えている、いい上手くて。

・・・結果はユナの勝ち、読み合いの連続の末、ユナが一枚上手だった

「あー！何か他にゲームねえ？格ゲー以外で」

俺は圭也にそう言うと

「あるよ、パソコンのやつ」

「女の子同士がなんとかカードとか使って戦うアレだろ？格ゲーじゃん」

「んーならあれは」

とあるゲーム機を指差す、黒色で艶掛かったボディがカッコいいゲーム機だ

「あれで俺とこれやろう！」

と出したカセットはコマンド入力で技が出るという格ゲー

「また格ゲーか！そんなに格ゲー好きか！」

「ああ好きさ！沢庵の次ぐらいに！」

「どのぐらいだよ！」

そんな言い争いをしている間、ユナと咲也は夕飯を作っていた

「あら、包丁の扱いが上手ね」

ユナは顔を赤らめ頷く

(可愛い・・・！)

咲也はハアハアと息を荒くし、興奮する。気がつけばユナの腰に手を回し、抱きついていた

「ヒヤッ」

驚いたユナは包丁を落とす、その拍子に指を怪我してしまった。

「ああ！ごめんね！」

指から出た血を舐めとる、この変態的行動にユナは驚きを隠せないようすだった。手を引くと恥ずかしそうに顔を背ける。

そんなユナを緩んだ笑顔で眺める咲也にユナは身の危険を感じる

「あっ、鍋が」

鍋に入っていた味噌汁が煮えたぎり、溢れそうになっていた。ユナは火を弱め味噌汁の味見をする

「どう？」

咲也は味見の感想を聞く、異様に顔が近い

「お、美味しい」

「よかったあー」

と咲也は胸を撫で下ろす、次に炊飯器が音を鳴らしたので確認、よく炊けている。

「おい！ご飯出来たよ！」

咲也はリアル格闘ゲームをしている男二人に言う。夕飯は味噌汁にご飯、あとハンバーグだ

男二人はがつつき、喉に詰まらせる。この馬鹿二人を他所に私はユナに『あーん』とされる妄想をして悶えていた。しかし彼女、とても歯が尖っている、舌とか噛んだら痛そうだ

などとユナを観察していると

「あ、あの」

「ん、なあに？」

「咲也さんは・・・私のこと、好きなんですか・・・？」

最後のほうは恥ずかしさで声が小さくなっていたが聞き取れた

「え、あ、ああ！うん、好き！大好き！」

するとユナはさらに顔を赤め、俯く。不味かっただろうか。それ以降、ユナは話さなくなった

夜、みんなは館のテラスに行き、星を見ていた。辺りは暗くよく星が見える。

「くっ！銀河宇宙に広がる暗黒物質が俺の右目に反応してやがるっ！」

圭也がちょっと何言ってるのか理解出来ない、こいつ怖い

「ね、ねえユナちゃん」

咲也は恐る恐るユナに話しかけた

「なに？」

「やっぱ怒ってる？」

「ううん」

ユナは少し悲しげな表情になる、咲也はどうしたのと問う

「ちよっと・・・お姉ちゃんを思い出したの」

「へえ、お姉ちゃんね。なんて名前なの？」

「ユリック、って言うんだ」

「へえ、ユリックさんは元気？」

ユナは首を横に振る

「分からない、どこかに行っちゃったから」

「っそうなんだ。どこかに・・・」

「さあ銀河の果ての大彗星にお願い事を！」

「ああ、お前が死ぬことを願うわ」

と輝也は冷ややかに言い放つ

「でも、今は・・・輝也がいるから・・・」

「・・・そうね。寂しくないわね」

そこで二人の会話は終わる。

――――

星を見終わったあと、みんなは部屋に行き、眠ることにした

お互いに別々の部屋である

「いや星が綺麗だったな」

と輝也は眩きベッドに潜る。今は何時かと携帯を開く、深夜だった。そしてここは圏外になっている。不便だなと思ったが睡魔が襲ってくる、輝也は目を閉じた

あれから何時間だろう

「輝也！起きろ！」

部屋が突然開き、圭也の音がする。何やらただ事ではなさそうだ

「なんだ、どうした。火事か？」

「ああそうだ！火事だ！」

「マジかよ！おい、咲也とユナは！？」

「まだ部屋だ！行くぞ！」

二人は部屋を出るとまずここから近いユナの部屋へ向かった

「ユナ！大変だ！」

無防備に鍵をかけていない、ドアを開けると寝惚けるユナを抱き抱え部屋を出る。そして咲也の部屋に行くと

「っ！咲也あ！」

咲也の部屋から火の音がする、圭也はドアを開けようとした

「待て！開けるな！」

「な、なんだよ！」

「バックドラフトが起こる！」

「っ、そうだな……。咲也！無事か！」

返事は全くない。俺は最悪の状況を考えて

「おいおい……。こんがりグリルでお出迎えはやめてくれよ？」

そんなことを言っているが、声は震え、目には涙が浮かんでいる

「やあ、あんた、吸血鬼だね？」

咲也の部屋から声がする。バン！とドアが内側から蹴破られると姿を表したのは黒いローブに身を包んだ少女である

「なんだよお前……。それに吸血鬼って」

そうだ、ユナは追われている身だった。まさかこんなときに！

「さあ、死んでもらおうか。吸血鬼さん」

少女は手の平に火の玉を出す。それをユナに投げつけようとしたときだ

「お前のせいだっ！あああああ！！」

圭也が殴りかかる

「くっ！このガキ！」

振りほどくと圭也は壁に頭を打ち、気を失った

「邪魔が入った、まあいいや。死ね」

そういい火の玉を投げつける、輝也はユナを抱き抱えその場を逃げる。とにかく山を降りれば・・・いや、しまった、今は夜。危険すぎる

取り合えず近くにあった部屋に入り、鍵をかける

「はあはあ、なんだよあいつ・・・」

「輝也、ごめんなさい」

「いや、いいんだ謝る必要はない」

「どこだよ！安心しな！私が消し炭にしてあげるから！」

さっきからドアか何かを壊している音がする。ここがバレるのも時間の問題か。ふと窓を見る、窓を開ける。そこから逃げられないかしかしダメだ、ここは二階。飛び降りても何とかかなりそうだが地面の状態が悪ければ・・・

そもそも何故あいつはユナがここにいると分かった？尾行でもされていたか？それに何故あいつは火事に気づけた、燃えていたのは咲也の部屋だけ。俺に報告するまえに咲也を助けないか？

そこで行き着いた答え、信じたくはない。友人がまさか・・・

そのときだ

ドアが破壊され、少女が入ってくる

「見つけたあ！」

「ま、待て！何故こんなことをするんだ！咲也！」

「・・・咲也？誰だそれは。私は《ライマー》！獄炎の魔女さ！」

燃え広がった火がさらに大きくなる

「ユナをなぜ殺そうとするんだ！何もしてないだろ！」

「・・・お前はここ最近で起きている謎の事件を知らないのか？」

「謎の事件？」

「学生や子どもが死んでしまう事件。胸の辺りを何かで刺され、体がとてもダルくなり、三日経つ頃には死んでしまうのさ」

「そ、そのどこにユナが関係してるんだ！」

「犯人は吸血鬼、だから片っ端から吸血鬼を駆逐してるんだよ」

「な・・・」

俺は言葉が出なかった、狂っている、なんてやつだ

「ま、私もこれは酷いと思うけどね。仕事だから仕方がない」

ライマーはまた手に炎を宿すと

「ま、許してね。『母殺しの炎』!」

一際大きい火の玉が放たれる、俺は迷わなかった。迷う時間はなかった。俺は、ユナの前に経ち手を広げユナを守る。覚悟を決め目を閉じる。だがいつになっても痛みや熱は襲ってこない。目を開けてみると

「ユナ・・・!」

ユナは手で火の玉を打ち消していた、手は焼け焦げ、煙を上げている。しかしその火傷はみるみるうちに治る

「そんな理由で私たち吸血鬼を・・・」

「なんだ、小娘が私に抵抗するか?」

「黙れ」

ユナはライマーを睨み付ける、その迫力にライマーは怯む

「許さない・・・貴女の肉と言う肉を全て切り刻んでやる」

輝也はそのユナに恐怖した

「へ、へへっ! 来いよ! お前なんか怖くないさ!」

ライマーは明らかに自信を無くしている様子だった

「罪を償え、愚かな魔女。『アンソニーはのどをつまらせて』」

ユナは一瞬でライマーに近寄る、そして、その鋭い爪で、切り裂く、切り裂く、切り裂く、切り裂く

「浅いんだよ！」

しかし力が弱かったのかライマーはユナを突き飛ばす

「あーあ、ローブが台無——」

ライマーの顔に冷や汗が出る。よろよろと後ろに下がる

「毒・・・だなんてね・・・」

ガハ、と血を吐くとライマーは逃げ出す

「よかった・・・」

とユナはほっとする。そこに

「輝也！大丈夫か！」

圭也が助けに来る、その後ろには咲也の姿が

「早く来い！ここも燃えるぞ！」

俺はユナの手をとり、館から逃げ出す、ごうごうと燃え上がる館。そして消防車のサイレンが聞こえる

「大丈夫かね！君たち！」

消防隊員に俺たちは救助された。こうしてとんでもない事件は終わったのだ

『第六章 吸血鬼と入院』

目を覚ますとそこは病院だった、あれから火事は消火され、俺たちは保護された。後々のニュースで見たが、あの館は全焼したが、周りの木々には一切燃え跡がないという不思議な火事だと報道があった。それにあのライマーのことを聞いた。だがそれらしき人影を見てはなかったようだ、ではライマーとはなんだとたのか、俺たちが見た幻覚だったのか？ いや、ただ可能性があるとすれば・・・俺はカーテンの向こうにいるであろう圭也と咲也を見た。ただそれは友人を疑う、これだけは嫌だった、だがそんな考えが出る自分が嫌だった。俺はみんなの様子が気になり、カーテンを開ける。そこには咲也が眠っていた、しかしなんと綺麗な肌か。

「ん？」

俺は彼女の首辺りに針で刺されたような傷跡が二本あるのに気がついた、そしてすぐ正体が分かった。まさかこんな吸血鬼小説で読んだことになるうとは。俺はすぐさまユナのベッドを見た。するとやはり、ユナは幸せそうに眠っていた、口元から血を流し。吸血鬼だと言うことは覚えていた、だがなぜ今、血を吸ったのか

「ん・・・輝也・・・」

ユナは目元を擦りながら目を覚ます、いや吸血鬼に咬まれたら吸血鬼になるのではと咲也を見た、が何ともなさそうである

「うわ、なにこれ」

ユナは口元の血を拭い、驚いていた

「咲也の血を吸っただろ」

「え・・・覚えてない」

まさか無意識ではないよな、さっきから咲也が静かで怖い、死んでいないよな

「おはよー、何があったの・・・」

と咲也は起きる、大丈夫かと聞くと何ともなさそうな顔をする。黙っておくべきか

「ああ、まだ圭也は寝てるね？」

俺はカーテンを見る、まだ寝ていると判断し、頷く。すると咲也は話を続けた

「ユナって吸血鬼だよな」

あまりにも直球的な質問に戸惑う、がユナは頷く

「だよな、じゃないと追い払えないもの。あんなの」

「知ってたのか？」

「ええ、と言うか本来の目的は私よ。隠れたから貴方たちが狙われたの」

「え、本来の目的が咲也って・・・」

それはつまり・・・

「そ、私も吸血鬼なのよ」

なんということだ

「でもどうして私が吸血鬼だと分かったの」

ユナは咲也に聞く

「血ね、私は血を舐めればそれがどんなのか大体分かるの」

「あの時・・・」

ユナは包丁で指を切ったあの時を思い出した

「そ、びっくりしたわ。こんなにも羽根を隠すのが下手な吸血鬼を見て」

ユナは顔を赤らめる

「そうだ、なら咲也はあのライマーってやつを知ってるのか」

あの獄炎の魔女たる者のことについて俺は聞いておくことにした

「ええ、獄炎の魔女ライマー。雇われハンターよ」

「雇われハンター？」

「依頼を受けて対象を狩ることで生計を立ててるやつよ」

「へえ、そんなやつが」

「そんな呑気に構えてていいの？」

「え、なんで」

「雇われてことは雇ったやつがいるってことよ。それに何故あいつは私たちの居場所が分かったか、それは依頼人が私たちのことを知っていたから。かしらね」

と咲也はカーテン、もといその向こうで寝ているであろう圭也を見た

「まさか、やめてくれ。友人を疑うような真似はしたくない・・・」

「じゃあ何故あいつが私たちの居場所が分かったか分かる？」

「それは・・・」

確かにそれが一番辻褄が合う、だけど――

「ま、まだ答えは分からないわね。せいぜい生き延びることね、お互いに」

そう言うとき咲也は病室を出た

しかし、圭也が敵だというのは信じたくない。但至少し疑いを持っている部分もある。どうすりゃいい！

「輝也？顔色が悪い――」

「輝也あ！大丈夫かえ！？」

そこに清香のお婆ちゃんが病室に入ってくる

「お母さん！病院では静かに！」

清香のお母さんまで

「次期神主に何かあってはいかんからな！心配なんじゃ！」

待て、まだ次期神主がどうの言っているのか。俺はユナにこっさりベッドに隠れるよう言った。清香のお婆ちゃんは妖怪を毛嫌いしているそうだ

「あ、清香はどうなりました？」

なんとか神主から話を逸らせよう。清香の件を聞いた

「清香は大丈夫じゃ、向こうで元気にやっとなるはずじゃ。ワシだつてそうだったからな！」

「向こう？」

「高天原ちゅー場所で、な。分かりやすく言えば異世界じゃ」

「はあ、そこで清香は元気にやっていると」

「そう！だから心配せんでいい！」

てか声がデカイ、注目を浴びてるぞ

「お母さん、輝也ちゃんも大丈夫そうだし帰りましょ」

「ああそうじゃな、ではな、輝也や！」

「ああそうそう、両親には無事だって伝えておいたからね」

「あ。ありがとうございます」

清香のお母さん、お婆ちゃんは帰り、ユナがベッドから出てくる
そして入れ替わりに咲也が戻ってくる

「ほい、ジュース」

と缶を二つこちらに投げる。二人は上手く受け取り、缶を開け中身を飲む。っってお汁粉じゃねーか！ユナはオレンジジュースか、いいなあ。というか何か恨みでもなるのか咲也は

「あるさ、こんな可愛いユナと同居だなんて妬ましい・・・羨ましい」
「い」

「お前がユナと一緒にいたらユナの体があぶねーよ」

「あら？私は貴方のほうが危ないと思うけど？」

「なんだよ、突然その・・・襲ったりしたりなんかしねー・・・
ったく何を言わせてるんだお前は」

アハハと咲也は笑う、するとすぐ真剣な顔になり

「で、どうする？ 私としては暫くは圭也と離れたほうがいいと思うの」

「ま、まあそれが得策だろう、ただどこっちが離れたら強行手段に出ないともいい切れないだろう？」

「圭也はただの人間よ？ 貴方にはユナがいるじゃない。すぐに殺してくれるわよ、なんなら今彼の胸にナイフでも突き立てる？」

「な、何を言い出すんだ！」

この信じられない発言に怒り、怒鳴る

「ねえユナ」

「な、なに？」

「貴女、ライマーを追い払ったときの記憶はある？」

「ない・・・」

「やっぱりね」

何がやっぱりなのか、俺が問いただそうとする前に彼女は言う

「この娘、あまり力を制御出来ない———と言うか使ったことがないから使い方を知らない。って感じね。あなたのお姉さんはどんな人だったの」

「えと・・・私のこと大切に想っていてくれて・・・私が人間と遊んでたら妬いてその人間を殺すぐらい好きで――」

「ユリックねえ、長い間吸血鬼をやってるけどそんな暴君吸血鬼は聞いたこと無いわ」

「それが何か関係あるのか？」

「いや？聞いてみただけ」

何だよこいつ。しかし力を制御出来ないとは。確かにあのときのユナは何かおかしかった

「ねえ輝也」

「なんだ」

「これは予想だけど、これから先、まだまだユナを狙うやつが現れるかもしれない。けどそのたびに貴方はユナを守ってね？」

「何を言ってるんだ、正直守られてるのは俺だよ」

考えれば俺もただの人間だ、なんの武器も無ければ能力もない。こんな俺に何が出来る

「そうかしらね？」

フフフと咲也は笑うとベッドに戻る

あれから数日後、火傷も治り、退院した俺たちだったが圭也から連絡が無い。こちらから連絡しても反応無し。ただ忙しいだけなのだろう。もしかすると病院での話を聞かれていないだろうか？

「むー・・・どうするか」

いや、圭也は関係ない。そうだ関係ないはずだ。と自己完結させておこう。

『七章 吸血鬼と機械』

江野 海——彼ならば圭也との連絡を付けてくれそうだが、まず海に連絡せねば。

・・・三度コールしたあと低い声が聞こえる

「もしもし」

「海か、今どこだ」

「学校だ、部活」

「ああ、部活動中か、悪かったな」

そう言えば海はロボット研究会に入っている。大柄でありながら器用な奴なのである。

「いやいい。何か用か？」

「あのさ、圭也なんだけど、何か連絡なかったか？俺が連絡しても反応ないんだ」

「・・・・・・・・俺も連絡は取っていないな、何か用があるのか？」

なんだ今の間は

「いや別になんで連絡を寄越さないのかなーって」

「そうか、まああいつもああ見えて忙しいだろうな。それはそうとこちらに來ないか？新作のロボットを見せたくてな」

「ああ、そうか。ロボット研究会はお前一人だよな。見せてもらうよ、新作」

「ああそうだ。あの彼女も連れてくるといい。挨拶もしておきたいからな」

「ああ、分かった」

通話を切り、ユナに学校に行くことを伝える。ユナは喜んで着いてくることにした、今は昼、日傘を忘れず持たせ学校へ向かった。

校舎に着いた、今は夏休みなので部活がある人しかいない、俺たちはまず海があるロボット研究会の部室まで行くことにした、グラウンドでサッカー部が練習しているがユナには気づかず練習に励んでいる、バレたら厄介だ。こっそり校舎に入ればあとはこちらの物、なに食わぬ顔で階段を上がり、ロボット研究会の部室前に到着する。

「よう、来たぜ」

「おお、来たか。まあ座りなよ」

と椅子を用意してくれた、俺たちは椅子に座り海と話す

「それで、新作はどれだ？」

「いや、少々大きくてね、グラウンドじゃなきゃ見せられないな」

そんな大きな物を作っていたのか

「まあ暇潰しになる話はある。・・・ここ最近起きている怪事件だ」

「まさか・・・三日経てば死ぬあれか？」

ライマーの話を思い出した、あいにく新聞は取っていない

「ほう、知っていたか。確かにそれだ。だがこれは新聞はおろかテレビですら報道されていない事件、なぜ知っている？」

「そ、それはだな。というかそんな極秘事件をなぜお前も知ってるんだ」

「ふふ、俺の情報網は意外に凄いで？」

確かこいつ、顔がかなり効くやつだったな

「妙な幻覚が見え、段々と体がダルくなり、三日経つ頃には死んでしまう病・・・」

「病？俺は吸血鬼の仕業だと聞いた――あっ」

俺はつい口走ってしまい、口を押さえるが遅い

「ほう吸血鬼、これは初耳。確かに遺体の胸の辺りには針のような物で刺された痕があると聞いた、もしかするとその彼女のように鋭い歯を持った吸血鬼の仕業かもな」

「な、ま、待て。ユナは吸血鬼じゃなくて・・・そのただコスプレしてるだけで」

「・・・いやただの冗談だが？」

「なんだ・・・」

「・・・まさか本当に吸血鬼なのか？」

「いや、違う！」

「フフツ、しかし吸血鬼の仕業と誰から聞いた。そもそもこの事件事態どこから聞いた」

流石にライマーなる魔女から聞いたなんて言えない、信じてもらえないだろう。そう黙っていると

「いやいい、言いたくないのなら無理に聞く必要はない」

海はユナの方を向き

「挨拶が遅れたな、俺は江野 海。よろしく」

手を差し伸べる、ユナは握手を交わす。ただユナの表情が何か変だ

「さてロボットでも作るか」

海はそこにあった机に向かいロボットを作り始めた

「なあ、何かあったか？」

俺はあの表情が気になりで聞いてみた

「・・・あの人、やけに冷たい手をしてた・・・」

単に冷えてたのだろう。と俺はユナに言う、クーラーが利いてるものな

そうしている内に、夕暮れになり、グラウンドには誰もいなくなる。

「誰もいないな、よしグラウンドへ行こう」

海は嬉しそうな足取りでグラウンドに向かう、俺たちはそのあとを着いていく、そしてグラウンドの真ん中辺りで待つように言われたのでそうしている。さてどんなロボットなのだろうか。

「待たせたな」

と海は戻ってくる

「ロボットはどこだ？」

「ここだよ」

と言い、指をパチンと鳴らす。すると空から一機の人型のロボットが落ちてくる、俺は思わず尻餅をつく、いやなんだよこれ。スゲーじゃん

「お、お、おおお！スゲー！なんでこんなの作れるんだよ！」

と俺は大興奮し

「それで、これはどんなことが出来るんだ？」

そう聞くと、海はロボットに乗り込み

「例えばだな、吸血鬼を倒すことが出来る」

「――え？」

反応に遅れた、ロボットの手はユナの体を掴む

「キャアアア！？」

「ユナ！――海！どういうことだ！」

「海？それは偽りの名。俺の名は――」

まさか、こいつも・・・

ストーリー
機械王。フフッ、この『対吸血鬼戦闘兵器試作一号』のテストに協力してもらおう」

するとロボットはユナを掴んだ腕をぐるぐる回し始める

「おい！てめえ！」

友人だろうが関係ない、敵に違いはないんだ！そう自分に言い聞かせ、ロボットに歩み寄る。

「さあ、見てるがいい。貴様の吸血鬼が苦しむ様を！」

ガパッとロボットの口部分が開いたかと思うと、音楽が、讚美歌が流れ始めた。なぜ讚美歌なのか、こちらは何ともない

「うわああああ！！！」

途端にユナの悲痛な叫びが聞こえる、ユナは耳を押さえ、歯をくしばっている。

「クカカカツ、どうだ、讚美歌攻撃は。次は——」

「やめろおおお！」

俺はロボットに駆け寄る、がロボットは俺を容易く腕で薙ぎ払う。吹き飛ばされた俺は激痛に意識が飛びそうになりながらも立ち上がる。

「そうだなあ、ニンニク攻撃でも」

なぜこんな時に俺は何も出来ない？何故こんなに無力？何故、こんなにも勇気がない――

震える足を押さえる、だけど震えは止まらない

「くそっ！ユナ、ユナああああ！！」

――力が欲しいか？

「え？」

ふと辺りを見れば白い世界、ここはどこだ？

誰だか分からないが力をくれるのか？

「ああそうだ、お前の欲望に応えて俺は出てきた」

欲望、ああ俺はユナを守りたい、ユナに危害を加える奴を駆逐する力を――！

「キヒッ、ならいいだろ。俺の力を分けてやる」

目の前に黒い影のような人が現れる、それは俺と同じぐらいの少年にも見えた。が、ただ黒い影で口や目は見えない。

「さあ受けとれ、お前の守るべきものを危険に犯す心配はなくなる」

ぶわ、と影は霧散し、俺のなかに入ってくる。そして何か力が湧いてくる感覚が体を襲う。

お前はなんなんだ？ 一体・・・

「なに、俺はあいつの邪な心から生まれた『荒魂』に過ぎないさ」

荒魂、ありがとう

「キヒッ、じゃあなア」

ハッ和我に帰る、アレはなんだったのか。いや、まずはユナだ。

「うおおおお！！」

俺はロボットに向かって走る、不思議だ、全く怖くない。

「なんだ！ また来たか！」

ロボットは左腕を俺目掛けて降り下ろす

「ふんっ！」

俺はその左腕を殴る。すると容易く左腕は粉碎され、ドウツと落ちる

「な、なに！？ 何が・・・」

力が湧いてくる！ 勝てる！

「ヒヒッ、いい力だ、荒魂とやらものは！」

右腕が黒い影に包まれる

「ユナを離せえ!!」

その右腕を思い切り胴体へと叩きつける

ポフッ! 胴体に風穴が空き、ロボットは仰向けに倒れる。

「ユナ! 大丈夫か!」

機能停止したロボットからユナは自力で抜け出し、こちらに向かってくる。俺はそのユナを抱き締めた

「よかった・・・」

心の底から安心した

「ありがとう・・・」

ユナは涙を拭い、そう言った

「・・・クソッ! 対吸血鬼だから人間には弱いのか!」

残骸のなかから海、いやストーカーが現れる

「ストーカーああああ!!」

俺が止めをさそうとした、だがそれはユナが止めた

「もうやめて・・・」

ふと腕を見ると血にまみれていた

「くっ、分かった」

「フツ、止めを刺さないか。まあ運に感謝する。それでは、輝也」
ボフツと白い煙が上がり、ストーカーは姿を消す

「くそっ！なんで海が！」

友人であった海が敵だと言うことにショックを受ける、どうして・
・今までは全て演技なのか？

「輝也・・・」

いや、待て。俺には今力がある。ユナに危害を加える奴を駆逐する
荒魂の力が・・・！

「ふふ、そうだ・・・」

壊してしまおう、ユナの敵になる奴は・・・全て・・・残らず・・・

「輝也！何か変だよ・・・」

腕に抱き着いたユナで俺はふと我に帰る、色々ありすぎたようだ・
・思考がおかしい。

「ごめんな、ユナ。でもこれからはお前を守る。」

右手を握り締める、そうだ、今は――

「ククッ、いいねえいいねえ！素晴らしい欲望に憎悪。人間の感情は実に美味い」

黒い影は学校を立ち去る輝也たちの背中を見て言う。

「それにこの残骸」

壊れたロボットの下に黒い影が広がり、沼のようにロボットが沈んでいく。

「じゃあな、ヒヒッまたいつか」

素晴らしい影に消えて行った

『第八章 吸血鬼と励まし』

あれからと言うものの、輝也は落ち込んでいる。なんかして私が励ましたいところだけど私は口下手なので躊躇ってしまふ。

さてどうしたものかとユナは悩む、そして一人の人物に辿り着いた、彼女なら何か思い付くかもしれない。私はさっそく彼女のところへ――行こうと外へ出た、しかし足を止める。よく考えてみれば私は彼女の家を知らない、どうするかと悩む、ふと鶴野神社が頭に浮かぶが輝也が言うには私のような妖怪は嫌われているそうでも行けない。

ハアと溜め息を吐いていると

「どうかした？溜め息なんか吐いちゃって」

「ひゃあ!？」

突然耳元で囁かれ、ユナは驚きの声をあげる、振り替えてみればそこには咲也がいた

「あ、あ・・・探していたんです!」

「ふふ、何の用かは分かるわ。彼のことでしょう？」

ユナは頷く

「じゃ、場所を移しましょ。本人の家の前じゃあ話にくいでしょうしね」

それから私は咲也に連れられ、静かな喫茶店に入った。そこでユナは紅茶を、咲也はコーヒーを注文し、それがテーブルに運ばれると咲也は口を開いた。

「それで、何かあったのかしら？」

私は海のことを話した。咲也は時折何かを考え込む仕草をした。

「大体分かったわ、確かに友人が敵なのは辛いわね。私も貴女が敵だったら嫌だわ」

と咲也は色っぽくユナを見つめてみせる。

「そ、それで私は輝也を元気にしたいんです」

「あら、それは簡単よ」

「え、何かあるんですか!？」

「ええ、彼に抱かれなさいな」

ユナの顔が真っ赤になる。

「な、なにを言ってるんですか!輝也とその・・・」

恥ずかしさのあまり言葉が詰まる。咲也は「冗談よ」とコーヒーを一口飲む。

「貴女が輝也に抱かれるなら私が抱くわ」

私は不覚にもドキッとした、すると咲也は私に顔を近づけてくる。何をされるのか、私は目を瞑った。

「貴女は優しいわ、ええ、とてもよ」

唇は触れることが無かった、ホッとしたが少し残念だった自分がいるのが許せない。

「それで、輝也には何をすれば・・・」

「そうね、まずは――」

あれから私は自宅へ帰った、咲也に言われたことをする為である。

しかし恥ずかしい、こんな服装初めてである。

咲也に渡された服、と言うより水着。紺の上下が別れていない水着である、なんでもスク水と言うそうで。

そのスク水を着て私は輝也の部屋のまえにいる、ほんとにこんなので輝也は元気になるのだろうか？

しかし恥ずかしい、なかなか部屋に入る決心が着かない。いや、何もしなくて事がいい方へ進む訳がない、私はやけくそにドアを開けた。

「・・・・・・」

さっそく輝也にその姿を見られた。

沈黙が続く——そして最初に口を開いたのは輝也だった。

「・・・え、なに。なにしてんの」

「そ、その・・・元気付けようと・・・」

顔が赤くなるのが分かる。輝也はクスリと笑い。

「ふふっ、ありがとな。ユナ」

と私の頭を撫でた。私は自然と笑顔になり、ホッとした。

「よかった・・・元気になってくれて」

「しかし誰の入れ知恵だ？スク水なんか・・・」

「輝也、鼻血鼻血」

「いかんいかん、興奮した」

と輝也はティッシュを鼻に詰める、いつもの輝也に戻ってくれたかな。とユナは安心した。

「そうだユナ」

「はい？」

「ライマーやストーカーが言ってた事件なんだけどさ・・・」

輝也は一息置き

「その事件の犯人はユナではないとして誰がいると思う？」

私は少しの間、考えた。確かに誰が犯人なのか、そもそも吸血鬼が犯人なのか？

「いや、ごめん。変なこと聞いて。夕飯作るか、それとユナ。着替えとけよ」

と輝也は部屋から出る、そう言えば今はスク水とやら水着、水浴びもしないのにこれは恥ずかしい。

なぜスク水など着ていたかの経緯を伝えると輝也は呆れたように言う。

「はあ、やっぱり咲也か」

「あいつは色々変なことを思い付くからなあ、ま、あいつなりに考えたんだろうけど」

とサラダをつつく

「ということは輝也は私のあの姿で元気になるような人ってこと？」

うぐ、と輝也はレタスを詰まらせる。私は急いで水を渡す、それを流し込んで息を吐く。

「・・・ああ、そう、だな。うん、元気出る。スク水で元気出ないのはいないと思う」

「そっか、でもそのスク水っていうのはみんなが着るのにしては小さいね」

「それは大人が着るものじゃないからな」

「・・・つまり子どもが着る水着が大好きなんだね」

輝也はしまったと言いたげな顔になる。

「ああ、そうだよ・・・なんかごめん」

「？」

輝也は食器を片付けてそくささと二階へと上がった。

「水着かー、私も海に行ってみたいなー」

私は吸血鬼、海はもちろん川にすら行けない。太陽が恨めしい。それに吸血鬼は基本的に金槌である、浮き輪でも無ければ溺れてしまう。

「はあ」

とため息を吐く、こんなことをしても太陽が平気になったりするわけがない。

その頃、輝也は

「まさかユナがスク水を着ているなんてな」

ユナは背も小さく見た目も幼いので似合った、興奮した、変態である。

「やべ、まじで可愛かったでしょう」

今や幻想となりつつあるブルマを着せてみるか？などと妄想していると、携帯が鳴る、メールのようだ。

「なんだ、誰からだ」

開いてみると咲也からだった。メールにはこう書かれていた

『そんなに悶えているようならもう平気なようね』

俺は窓を開ける、そこから見える道に咲也がいた。咲也はこちらを見たと手を振った、なんてことだ恥ずかしい。咲也は俺の姿を見て安心したのか暗闇に消えていった。

ああ、そうだ。海・・・いや、確かにショックだった、けど落ち込んだところで何になる？海が戻ってくるわけではないだろ、俺。

「・・・ああ、そうだな・・・」

明日は圭也に会いに行こう、敵なのか否か・・・敵であってほしくないがな。

『九章 人間と人間』

よし、圭夜の家に行こう。と輝也はユナに言う、ユナが頷くと日傘を持たせ二人外へ出た。

セミはもう鳴かず、そろそろ秋だと言うことを知らせている、しかしまだ暑い、汗を拭うとそくささと圭也の家へ向かった。

少し歩けば辺りには大きな一軒家が並ぶ通りに出た、ここに圭也の家がある。俺は慣れた足で圭也の家の前まで辿り着く。そしてインターフォンを押す、ビーとブザー音が鳴ると、暫くして圭也が姿を現した。俺たちの姿を見た圭也は驚いた様子だったが家に招き入れた。

広い玄関で靴を脱ぎ、圭也のあとを着いていきリビングのソファに腰をかけた、そして向かいに座った圭也が口を開く。

「どうしたんだ？突然に来て」

「いや、連絡を全然寄越さないから何があったのかなと」

「フツ、なるほどな。だがそれは建前、そうだろう？」

俺は頷いた、圭也も気づいているようだ

「本当は俺が敵か味方かを聞きに来た、だろ？残念ながら俺は敵だ」

「なんでなんだよ、どうしてそんなに吸血鬼を嫌う」

「お前は吸血鬼事件を知っているか？ライマーから聞いたと思うが」

「ああ、ストーカーからも聞いたさ」

「ストーカー？まあいい、あの事件の被害者を教えてやろう」

圭也はポケットから一枚の紙を取り出す

「これは？」

「それは吸血鬼事件を個人的に調べてるサイトのページを印刷したものだ、そこの被害者を見てみな」

俺は言われた通りに紙を見る、被害者だろうか？人の名前が並んでいる、そこに気になる名前があった

・ 夜須 剛（47）

・ 夜須 恵（46）

・ 夜須 智美（14）

これは俺も知っている名前だった。これは圭也の両親に妹の名前・

「分かっただろ？お前には言わなかったが数日前に俺以外の家族は死んだ、吸血鬼のせいだな」

「それで復讐か、吸血鬼を全員皆殺しするというつもりか」

「いいや、違う。俺はこれ以上被害が出ないように悪を倒しているだけだ」

「んな！やってることは変わらないだろ！」

「何を言ってる、街の人を襲う怪人を倒すヒーローと何ら変わりはないだろ」

「ヒーロー気取りか圭也！悪いがこれ以上ユナを苦しめたりはさせない！」

「ヒーロー気取り、そうかもしれない。だが！ヒーローになればいいだけのこと！」

二人は立ち上がる、ユナはオロオロと二人を見る

「圭也！テメーを倒す！」

「立ち上がる障害は誰であろうと潰す、たとえ友人でもな」

ゴッ

二人の頬にお互いの拳が入る、そしてすぐに離れ、頬を拭う。

「はっ、お前とまじ喧嘩はいつ以来だろうな！」

圭也は拳を構える

「さあな、ただお前は俺に勝ったことがあるか？」

俺もまた同じように構える。俺にはあのときの荒魂の力がある、決めただろう、ユナに危害を加えるものは潰す。と、そう自分に言い聞かせる。しかし何かがおかしい、力が沸かない、あの黒い力が

「おらあ！」

そんなことを考えていると圭也の拳が飛んでくる、俺はそれを避け、腹に拳を飛ばす、が圭也はそれを左手で受け止める。そして圭也は蹴りを入れる、ゴロゴロと部屋を転がり、立ち上がる最中分かった気がする。

圭也はユナに危害を及ぼしていない、つまりあの荒魂の力は使えない？だとすればこいつは俺だけを潰すつもりか。

「どうした？本調子はないか？」

「いや、出るさ。ちょっと油断していただけでさっ！」

ダツと走り拳を振り上げる、サツと圭也はガードするがこれが狙い、俺は蹴りを圭也の脇腹に入れる。

「っ！ぐう・・・」

飛び退いた圭也は脇腹を抑える。

「まだまだあ！」

圭也が一步踏み出したそのときだ

「おいおい、なんだ？見せたいものは喧嘩か？」

一人の男が現れる、その眠そうで虚ろな眼は二人を見る

「・・・来てたのか、まあいい。見せたいのはそれだ」

とユナを指差す

「ほう、なるほど話に聞いた通りに可愛い吸血鬼だ」

フツと姿が消えたと思うと男はユナの後ろにいた

「えっ・・・」

男はユナの首に何かを巻き付ける、そしてユナを抱えてどこかに連れ去ろうとするではないか。ユナは抵抗するがどうやら力が出ないようだ。

「おい、テメェ！」

輝也が後を追おうとした

「おっと、誰が行かせるか」

そこに圭也が立ち塞がる

「圭也あ！」

「すまないが《シェリダン》との約束でね」

あの黒い力が沸き上がるのを覚えた、こうなれば容赦はしない。コイツを倒しユナを救う。

右腕が黒い影に包まれる、それを見た圭也はギョツとする。

「お前・・・それは・・・！」

「黙れ」

その右腕を頬に叩き付けた、圭也は吹き飛ばされ壁に叩き付けられた。

「へ、まさかお前、そんな力をね・・・」

「おい、あいつはどこに行った」

「・・・いいだろう、永遠に日の暮れることの無い城、《不夜城》だ」

「不夜城・・・？」

しかし圭也から返事は無かった、輝也は家を出るとシェリダンを探しに向かった。

あれから数分後

「む・・・負けたのか、俺」

眼を覚ました圭也は頬を撫でる、なぜ負けた。あのような悪に。

「なんでっ・・・」

涙が溢れる、このままではまた犠牲者が・・・力が欲しい・・・

『へえ、力が欲しいか』

どこからか声が聞こえ、辺りを見渡すが何もない。

「ああ、欲しいさ、悪から皆を守る力を！」

『フフ・・・ならあげるわ、闇を浄化する私の力を』

視界が白くなっていく、太陽のような暖かさを感じながら圭也は眼を閉じた。

カーカー

鳥の鳴き声で圭也は眼が覚める、何だったのだろうか。あれは夢だったのか？ふと右腕を見るとほのかに暖かい淡い光に包まれていた。

「これは・・・」

グッと拳を握り締める、待ってる輝也・・・！圭也は立ち上がると不夜城へ向かった。

『十章 人間と救出劇』

あれから宛もなくさ迷う輝也、怒りに任せ走り続け、息が上がり、ふと我に帰る。辺りを見渡せばそこは焼けた跡の圭也の別荘。

「やあ、若いの、どうかしたか？」

燃え跡の瓦礫に一人の女性がいた

「いや、ちょっと・・・人を探してて・・・」

そうだ、考えてみれば不夜城なんてどこに、クソッ！こうもしている間にユナが・・・

「へえ、不夜城。懐かしいね」

「え？」

俺は不夜城なんて口にはしていない、なのになぜ分かったんだ。

「ん、確かに言ってない。だけど私には分かるのさ。不夜城ねえ懐かしい、私がまだ高天原にいたころは当主とよく遊んだもんだ」

とケラケラ笑う

「なあ高天原って・・・不夜城を知ってるんだな!？」

「ああ知っているさ、なんせ高天原はあたしの故郷さね」

占めた、これで高天原まで案内してもらえれば。

「案内？構わないさ」

まただ、なぜこの人には考えていることが分かるのか、いやそれより。

「本当か、なら早速――」

「そいつの言うことに耳を貸しちゃダメよ」

咲也の声が聞こえたと思うと目の前にいた少女目掛けて咲也が突っ込む。

瓦礫はさらに崩れ、土煙が辺りに立ち込める。

「大丈夫？輝也」

いつの間にか隣には咲也がいた。

「おい！なんで突然！」

「あんたは疑問に思わないの？」

土煙のなか、ゆっくりと少女が立ち上がるのが見えた。

「彼女は《覚》、あのままだと心を吞まれてたわよ？」

覚がよく分からないが、心を吞まれるとは？

「まあいいわ、私が不夜城まで案内する」

「行かせるか！あそこは私の思い出の場！私を受け入れてくれたあの方の城！」

「早く！覚自体に戦闘力はないわ！けどかつて山神だったものの、何をするかは分からない！」

「山彦お！！その人間二人を逃がすなあ！」

覚はそう叫ぶ、すると

「了解い！！猫又たちい！！あの山に向かえ！！」

この山の向かいにある山から声が聞こえる。

「さて、あとはあなたたちが山から出れないようにすればいい」

ニャーと猫の鳴き声がしたかと思うと大量の猫が輝也たちを囲み、襲いかかってくる。

「私はまた山神となる、この山を使ってね、そしてあの方へ恩返しをするのだ」

「おいおい、なあ咲也、どうする」

襲いかかる猫又を振り払いながら言う、咲也はうーむと悩み。

「ダメだ、分からないわ」

「ちょ・・・」

その時だ

「対妖怪試作型戦闘兵器YASAKA、投入」

ドン！と空から人の形をした機械が落ちてくる、背中のハッチが開き出てきたのは。

「海・・・いや、ストーカー！」

「ククク、吸血鬼に勝つならばまずは妖怪の対処をせねばな。ここにいい実験所がある。行け、輝也。これは友人としてだ」

「海・・・！」

複雑な気持ちだがこれは助かる、二人は山を降り、咲也の案内に従った。

「ちい逃がしたか！」

「おっと、待て。お前さんたちの相手は俺だ、ではテスト開始——
——『対妖怪試作型戦闘兵器YASAKA——モード御柱』

腕を筒状に変型させ、辺りにいる猫又を吹き飛ばす。

「ふん、神の力を再現したつもりか人間め」

「カカツ、かつて山神だった身なら分かるだろ、諏訪を奪いし神の妻の恐ろしさ」

「だが貴様は分かっているのか？」

「第二派あ！！烏天狗う！！」

遠くから山彦の声が聞こえる。

「貴様に味方はいない、と言うことを」

「ここは・・・」

咲也に案内され辿り着いたのは鶴野神社だった。

「ここに高天原への扉があるわ、ただ——いえ、ちょうどだわ」

「ちようどっ」

「今は逢魔時・・・高天原に行くことが出来る時よ」

咲也は輝也の腕を引っ張り、社の戸を開け、御神鏡のまえに立つ。

「お、おい。これで行けるのか？」

「・・・目を閉じて」

「うん・・・」

言われた通りに目を閉じる。それと同時に目を閉じても分かる光が二人を襲い、ぐらりとよろけるような方向が分からなくなる感覚に襲われた。

どのぐらい経ったか、目を開けるとそこは鶴野神社の社ではなく、見知らぬ森だった。

「着いたわね・・・」

やけに静かな森を歩くと突然明るくなった、太陽がそこにあるかのように。咲也はどこからか傘を取りだし体を守る。よく見れば城がある、これが――

「これが不夜城よ、やれやれ、ここに来る吸血鬼は私とユナで初めてじゃないかしら」

いざ城へ入ろうとした、そこに人が倒れているのに気づく。

「な、何があったんですか!？」

まだ意識はあるようだ、輝也は男を城壁にもたれさせる。

「何があったんですか・・・」

男はゆっくりと答えた

「ユリックが・・・危ない・・・あの野郎・・・他にも吸血鬼を・・・とにかく、少年、俺が人間に頼むのは癪だが、ユリックと、あの吸血鬼を助けてくれ!」

そう言う男は気を失った、ユリック?それはいつの日にか聞いたユナの姉では・・・

「行こう、咲也」

「ええ、そうしましょ」

古城に踏み入れた二人はかび臭い臭いにムツとする。城内はやけに静かで人がいるのか疑わしいぐらいだった。

「覚ってやつがいうにはここに主がいるようだが」

「主ねえ、ここは数百年前に無人の城のはずよ」

「手当たり次第に探すか？」

「ええ、そうね。私は地下に、貴方は上をお願い」

「よし分かった、行ってくる」

そういい二人は別れた

「暗いなあ・・・」

この城、やけに暗い。外は朝のように明るいと言うのに窓から一切の光が入ってきていない。不気味に思いつつ手当たり次第に進むと

小さな光が見えた、占めた。と近づくそれは蝋燭だった、誰かがさっき点けたのだろうか？まだ新しい。いやこれはありがたい、使わせてもらおう。と蝋燭を手にし、探索を続け、蝋燭があれば火を灯していく。そんなことをしている内に最上階にある大きな扉の前まで来ていた。

ゆっくりとその扉を開ける、そこは誰かの部屋のように、ベッドや本棚が置かれていた。そのベッドに一人、少女が眠っている。

「あの・・・」

返事はない、熟睡しているようだ。輝也は少女に触れてみようと思肩に手を伸ばす、手が僅かに触れたときだ。ブワツとシーツが舞ったと思えば少女の手は輝也の首を掴み、持ち上げていた。

「誰？あなた・・・」

「がっ・・・ぐっ・・・」

「・・・侵入者、じゃないようね」

パツと手を話す、ドサツと床に落ちた輝也はゲホゲホと咳き込み、少女を睨む。

「ごめんなさい、人間。ところで何か用かしら？」

「ユリック！ユナが！ユナが危ない！」

「え・・・ユ・・・ナ・・・？」

どういふことか思っていた反応ではない。

「ごめんなさい、私ちょっと記憶が・・・けど、ユナ、何か思い出しそうだわ・・・大切な・・・」

「そうか、記憶が・・・まあいい。早く！あいつは何をしでかすか！」

輝也はユリックの腕を掴み、階段を降りだす。

「ちょっと！何処へ行くのよ！」

「最上階まで来てあんたがいた、奴は地下だ！」

咲也・・・無事でいてくれ！

「・・・ここが高天原、か」

朝日のように眩しい光のなかに佇む城を眺めて圭也は言う。

「さあ、悪を潰そうではないか」

グッと右手を握り締める、この右手に宿った力は・・・悪を消すことが出来る。

「やるしかない、待ってろ。輝也」

「うわ、なんだこりゃ」

地下のある部屋に來た輝也は驚いた、壁や床は碎かれ、ボロボロになっている、誰かと戦ったのだろうか？

「咲也・・・」

彼女のことだ、だが本当に大丈夫だろうか。「ちょっと、ここは私の城よ。なんなのこれは」

「あんな、ここに一人吸血鬼を利用するやつが現れた、そいつはユナを拐い、ここに逃げてきたんだ」

「なるほど、この荒れ模様だとほんとに地下ね」

ユリックはずんずんと前を進む、こんなにも暗いのによくもまあ進める。

「吸血鬼は暗いところでも目が効くのよ」

「そうですか」

さらに地下へ、地下へと階段を下る二人、ふとユリックの足が止まる。

「ここが最下層、のようね」

重々しい鉄扉を開けると急に明るくなった、それは太陽の光ではなく、人工的な電気の光だった。その光のなかにシェリダンがいた、そしてその後ろには、ユナ、咲也、そして――

「清……香……？」

清香が捕らわれていた

「やあ、ようこそ。君たちはこの侵入者たちの仲間だな？」

「ああ、そうさ。返してもらおう」

「いやそれはダメだ、私はこの吸血鬼二人と――その吸血鬼に興味がある」

「じゃあ清香も含めて力づくで奪ってみせる！」

黒い影が右腕を包む、それを見たシェリダンは悲しげな顔になる。

「……それは人が持つべき力ではないのを知っているのか？少年」

突然シェリダンの腕が伸び、輝也を襲う。輝也は不意を喰らい吹き飛ばされる。

「人が持つべきではない……？知らねえな！ユナを守る力に所有権はない！」

さらに黒い影を強くする

「……そうか、その《マガツチ》の力に吞まれる運命を選ぶか。

ならば少年、貴様の目を覚まさせてやろう！自らを改造したシェリダンに勝るものはない！」

再び腕を伸ばしてくる、それをサッと避け一気に近づく！！だがシェリダンの腹から砲台が現れ、弾が打ち出される。体を襲う激痛、だが死んではない、見ればユリックが弾を受け止めていた。

「ユリック！」

「つたく、ユナを助けるんじゃないの？」

弾を投げ飛ばし、シェリダンに歩み寄り、砲台をへし折る。そして腕をしっかりと掴んだ。

「吸血鬼、何のつもりだ！」

シェリダンは振りほどこうと動くが吸血鬼の力には敵わないようだ。

「さあ！今よ！」

「おおおお！！」

右腕を包む黒い影がだんだん大きくなる。そしてその渾身の右腕をシェリダンに叩き込んだ。

ドオン！と激しい衝撃によりシェリダンは気を失った、腕からは様々なコードが剥き出しになっている、恐らく動くことはないだろう。

「ユナ！咲也！清香！」

輝也は急いで三人を解放する。

「ユリック！思い出せ！ユナだ！」

しかし返事はない、ユリックはその場に倒れていた。

「ユリッ——」

「シェリダンを倒したか」

そこに圭也が現れる。

「圭也あ！」

「さあ輝也、お前の悪を浄化する時だ！」

右腕から強烈な光が発せられる。思わず目を瞑る。

「さあ、始めようか。あのあと与えられた悪を滅ぼす太陽の力《八咫鳥》お前は勝つことは可能か？」

『十一章 人間と安堵』

「さあ全て、燃えてしまえ、邪な心も、吸血鬼も、妖怪も全て！この八咫鳥様の太陽で！！」

圭也は拳を床に叩き付ける、そこから熱風が吹き荒れる。しかし黒い影が盾となりそれを防ぐ。

何としてでもユナたちを守らなければ。俺は圭也に向かって突っ込み、拳を叩き付けた、しかしそこに圭也はいない。

「『八咫鳥キック』！」

上から圭也が蹴りを入れてくる、輝也はそれをガードするが、まるで三回蹴られたかのような衝撃にガードを崩してしまう。

「三本足の鳥、それが八咫鳥。知らないのか？」

「知らねえな！　ったく！　何処までも俺たちは仲がいい！」

今度は黒い影が輝也を包む。

「見せてやる、俺にユナを守る力をくれた神、《大禍津日神》の力！」

黒い影に包まれた輝也はもはや人ではなく、鬼のような姿をしていた。

「皆を守る力、八咫鳥様に敵うと思うてか！」

圭也の背中から烏の羽根が現れ、空を飛ぶ。

「さあ、輝也。諦めてくれ、俺はお前を救うんだ!」

右腕に光が集まっていき、その光は徐々に大きくなる。

「太陽を泳ぐ龍!」
プロミネンス

その球体を叩きつけようとしたときだ。一筋縄の黒い影が圭也を貫く。

「なっ・・・」

光は消滅し、圭也は床に落ちる。その一筋縄の黒い影はユナだった、しかし様子がおかしい。

「不味いわね、彼女、そうとう怒ってるわよ」

いつの間にか起きていた咲也が言う。

「怒ってる?」

黒い影は霧散し、右腕に入っていく。

「恐らくユリックが倒れているのは圭也の仕業と思っているようね」

「このままだとどうなる?」

「前にも言ったでしょ? 彼女は力の使い方を知らない。このままじ

やあ手に負えなくなるわ」

「・・・いつつ・・・何が・・・」

清香が目を覚まし、辺りを見る。

「よう、久しぶりだな」

「輝也・・・！」

ドオオン！！

激しい衝撃と共に圭也が壁に叩き付けられる。輝也は何かあったのかを説明した。

「なるほど、なら私の御札で力を封じることが出来ればあるいは・・・！」

「急いで、精神状態には《Furor》《Insane》《Wahnsinn》がある、一番危険なのは――」

言いかけたとき、ユナと圭也がこちらに飛んできた。

「とにかく！まだユナはFuror!間に合うわ！」

「行くぞ清香！」

黒い影は剣のように鋭くなる。清香は御札を投げる、その御札は圭也に貼り付き動きを止める。

「こ、これは！」

「急いで！神様の力を止めるほどの力はないわ！」

「清香あ！貴様あ！」

ドッ、輝也の剣が圭也の胸を貫く。

「・・・俺は死なない、悪を・・・滅ぼすまで・・・は・・・」

ドサッと倒れる、悲しむ暇はない！次はユナだ！御札は既にユナに貼り付き動きを止めていた。

何をすればいいか分からない、とにかく――

・・・俺はユナを抱き締めた、ユナは腕のなかで暴れる、その気になれば俺を殺してでも脱け出すことは可能だ。

「――驚いたわ、あの状態に陥った吸血鬼を大人しくさせるなんて」

咲也が感心していたときだ、ユナは輝也の肩に噛み付いた。

注射針を刺したようなチクリとした痛みが走り、次は血が吸われていくのが分かった。

ああ・・・吸血鬼に血を吸われると・・・どうなるんだっけ・・・

薄れゆく意識のなか、輝也は考えた。

あれから何日経ったか、ようやく輝也は目を覚ました。

「グッモーニーン輝也」

「……………咲也？なんで……………ユナは？」

「ふふ、自分よりもユナだなんて、貴方は優しいね。大丈夫、あなたの隣で寝ているわ」

隣を見るとユナが幸せそうに眠っている。ああ、あれは夢なのか？いや違う、俺はあのとき圭也を……

「すまない……………圭也……………」

涙が溢れる、あの時は敵とはいえ、友人を殺すなんて……

「……………今は泣きなさい、友人の為に、けど、貴方のしたことは間違っていないわ」

そう言うと咲也は部屋を出た。

「よかったの？一緒に泣かなくて？」

部屋を出た咲也にユリックが声をかける。

「泣かないわよ・・・」

「吸血鬼と人間でも仮には友達、悲しいはずよ」

「友人のまえで泣き顔は見せれないわよ」

咲也は目をゴシゴシと拭いた。

「ところで貴女は思い出したの？」

「ええ、思い出したわ。私は《シヴァ》に記憶を壊されたってことね」

「許すの？」

「ええ、彼反省してるみたいだし」

「そう。ところで貴女たちを襲ったヴァンパイアハンターはシェリダンではないのね？」

「ええ、違うわ。もっと危ないやつよ」

「・・・へえ、これは他の吸血鬼たちにも注意するように言っておかないと」

「あと吸血鬼事件はどうなったの？」

「さあね、ただ私の知り合いに犯人はいないってことが確かよ」

「そうかしらねえ、ま、あんた見た感じ古参の吸血鬼だから変に動けないか」

「それもそうね、ふああ、寝ましよ、疲れたわ」

「そうね、そうしますか」

二人は適当な部屋に布団を持っていくとそこに敷き、眠りに就いた。
泣き止んだ、もう嘆かない。気持ちはスッキリした。

輝也は部屋を出る、隣の部屋が開いているので覗いてみればユリツクと咲也が寝ていた、ユリツクはどうするのだろうか、行く当てはあるのか。そう言えば海はどうなったのか、あの山に言ってみるか。

外に出れば朝日が昇り始めていた。輝也は真っ直ぐあの山へ進む。
——暫くしてあの山に到着する、そこには覚も海も誰もいなかった。誰が勝ったのか分からなかった。

瓦礫の山を見ると一羽の鳥が止まっていた、その鳥を見てギョツとした、その鳥の足は三本あるのだ。それは圭也が言っていた八咫鳥そのものだった。

暫く八咫鳥と見つめあっていると八咫鳥はフイとそっぽを向き、何処かへ飛び去った。何だったのか、海のことは今日学校に行けば分かるだろう。

そうと決まれば輝也は家に戻る、朝食の用意をしなければ、ユナが起きてしまう。

立ち去る輝也の背を見詰める影が一人、その影はニヤリと口元を歪めると森へと消えていった。

『十二章 吸血鬼と吸血鬼と吸血鬼と』

朝食が出来る頃、ユナが目を擦りながら起きた、そう言えばユナに血を吸われたな。しかし何ともない、これはどういうことか、あとでユリックか咲也に聞こう。

「・・・おはようございます」

あの時のことは覚えていないだろう、ライマーのときもそうだった。

「おはよう、朝食出来てるよ。そうだユリックと咲也も」

ユナは首を横に振った

「お姉ちゃんはいいわ、私が人間といるのを見たら・・・」

「ああー・・・いや、大丈夫だろ」

根拠はないが何故かそう思えた。

「その、助けてくれてありがとうございます・・・」

「いやいや、どうも。お姉ちゃんも見つかったしよかったな！」

ユナは頷くと朝食を食べ始めた、こちらも朝食を食べ終わると学校へ向かった。学校に圭也はいなかった、それもそうだ、彼はもう・・・

思い耽っていると。

「よう、あれからどうなった」

「海・・・生きていたか」

「フフッ、俺の作品に負けはない」

「あの妖怪はどうなったんだ」

「さあな、逃げた、別に殺す理由もないしな」

「そうか」

「あのあと何があったかは大体分かる、しかし圭也がな・・・」

「ああ、でも――」

俺は瓦礫で出会った八咫鳥を思い出した。

「まだ生きている、そんな気がしてならないな」

「ほう、それは面白い、死んだ人間が蘇るか。それはゾンビかキョ
ンシーか吸血鬼か」

「・・・なあ海、お前は何者なんだ？」

「・・・なに、古くから人間と関わりがある者さ」

人ではないと言うか

「それに俺は元々高天原にいた身だ、あそこには妖怪や神々がウジ
ヤウジャいる。俺はその妖怪の一人の――」

そこまでいいかけたときだ、チャイムが鳴り響き、海は「まあいい、じゃあな」と自分のクラスへと帰って行った。

「えー、最近この辺りで不審者や誘拐事件が多くなっている。みんなも気を付けるように――」

担任がそんなことを言っている、吸血鬼事件のことだろうか、それに事件はここ周辺でしか起きていない、つまり犯人はこの近くにいる？

「――天野、おい、天野」

「へ、あ、はい！」

「夜須はどうしたんだ？」

「え、あ・・・休むと・・・」

「・・・そうか、分かった」

と言うと担任は出席簿に休むことを記入する。

――
授業が終わり、放課後となる。不審者対策とし帰宅路には職員が何人か見張りをしている、これを逆手に取れば吸血鬼事件の犯人と遭遇出来るのでは？と思った矢先。

「やめときな、危険しかない」

誰だろう、一人の少女が声をかけてきた。

「やめときなって・・・何考えてたか――」

「吸血鬼事件でしょ？それを知ってるってことは貴方・・・」

「待って、なんであんたも知っているんだ」

もしかするとコイツは敵なのかもしれない、一応警戒しなければ。

「ああ私？ちょっと呼ばれて来たのよ」

「誰に？」

「咲也って名乗ってるわね、今は」

咲也・・・？あの咲也だろうか、それにそう名乗ってるって・・・

「まあ貴方とは味方のようなね、よろしく、私は《ネラプシ》わざわざ外国から来たのよ寝床を紹介してちょうだい」

「ちょっと待てなんだ突然寝床を紹介しろだなんてそんな急に言われても」

「あら、ならこの町の住人全員を私の眼で殺してもいいのね？」

ネラプシの紅い眼が嫌に目につく、仕方ないこんな恐ろしい娘、咲也に文句を言ってやる。

「仕方ねえ、俺の家に行こう、まだ咲也がいるハズだから」

ふと思った、俺が家にいないあいだユナは何をしているんだろうか。

こうして自宅に帰ると自室が騒がしい、何かと部屋を覗いてみると。

「そらっ最後の切り札！」

「奪還！」

「何をするだー！」

ユナと咲也とユリックが大乱闘のゲームをしている、しかもなんだお菓子はジュースを並べて、誰の部屋だと。

そう呆れていると。

「面白そうじゃん！混ぜて混ぜて！」

と、ネラプシは部屋に入っていく。

「お、ネラプシじゃん。来てたの」

咲也が最初に気づき彼女を紹介する。

「彼女はネラプシ、私の友人でね、わざわざ東ヨーロッパから来てもらった」

「よろしく!」

なんだ、やけに機嫌がいいな、あいつ。あ、加わってゲーム شدした。仕方がないので俺は別の部屋、もとい親父の部屋に行き本棚から適当に本を取り読むことにした。

しかし、この家がこんなに賑やかなことはあっただろうか、いや無いな。何となく嬉しい気持ちに顔をにやつかせ、本のページを開き読み始める。

「・・・・!!」

「・・・・・・!!」

あれから数分、騒がしい、なんて騒がしいのか、女子は、いや吸血鬼どもは。

「夕飯はニンニク料理オンリーにしてやろうか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かになった。デビルイヤーは地獄耳か。

「とりゃー!!」

「あ、そこスカーレットデビル」

「マジ!? 繋がるのそれ!」

「ネプラシとユナも仲良くなれてよかったわね」

ユリックと咲也は二人仲良くゲームする姿を見守っていた。

「おーい、夕飯出来たぞ!」

下から輝也が呼ぶ声がする、吸血鬼たちはゲームを止め、一階の食卓へ向かった。

食卓にはハンバーグが並べられており、みんなはテーブルを囲むように椅子に座り、「いただきまーす!」と元気よく――

「ちょっと待て、なんで当たり前のように咲也たちがいるんだよ」

「あら、いいじゃない。別に」

「よかねーよ、お前は自分の家があるだろーが」

「まあ、ケチね、私は今起きたばかりよ？」

「何気に全員の分用意してるじゃん」

ネラプシがそう言う、なんか癖で作ったんだよ！言わせんな恥ずかしい。

「まあまあ、ご飯ぐらい楽しくさ、ね？」

ユリックがその場をなだめる、確かにそうだ、だがこのままだと付け上がりそうだな。

「うめえ、やべえ、うめえ」

静かに食えんのか、咲也は。そういや咲也に聞きたいことが。

「なあ、あの時俺はユナに血を吸われたよな。何ともないんだが」

「ああ、それ・・・はね・・・ゲホッゲホッ！この米いいところのだな、吸血鬼になる・・・にはっ！喉につ！」

「食ってから話せ！」

何なんだ！昔からこんな奴だったが何も変わってないな！コイツは！

「私・・・輝也の血を・・・？」

あ、不味かったかな。ユナは気まずそうに顔を伏せる。

「いやいや！俺はこの通り何ともないし仕方なかったし！」

「うう・・・ご、ごちそうさま・・・」

そう言うとそくささと階段を上がり部屋に入ったのだろうか、ドアを開ける音が聞こえた。

「やれやれ、別に気にしてないのに」

「あの娘はねえ、血を吸うことが嫌いなんだよ」

ユリックはそう言う、俺が頷くと話を続けた。

「私は吸血鬼であることに誇りを持って生きた、でもユナは人間らしく生きたいのさ、ま、私がそれを許さなかったけどね」

「何故ドヤ顔なんだ、それに別に吸血鬼らしく生きる必要なんてあるのか？」

「そりゃ吸血鬼として地位を示さないとね、嘗められるわよ。高貴なのが吸血鬼ってイメージが強いからねー」

「あら、貴女はまだ古い仕来たりに従ってるの？」

「何よ咲也、私はあのブラド三世の血筋のハズよ」

「え・・・・・・・・そうだったかしら」

「え・・・・・・・・」

「・・・私は古参の吸血鬼だけど・・・貴女がブラド三世の血筋ではなかったハズよ」

「ごめん、なんか勘違いしてたみたい」

いや、俺に謝られても

「フフ、とんだ勘違いね？妹さんに謝りに行ったら？」

「そうするわ、ごちそうさま」

そう言うユリツクはユナのところへ向かった。

「ま、出鱈目だけどね。彼女がいつ、どこで生まれたか知らないもの」

この吸血鬼恐ろしい。

「さて、私もごちそうさま。ネラプシは私のところへ住まわせるわ」

「よろしくお願いします」

どうでもいいが食うの遅いな。

暫くしてネラプシが食べ終わり、俺が食器を片付けていると。

「あれ？ ユナ来てない？」

ユリックが来た、どうやらユナを探しているようだ。

「部屋にいなかったのか？ こっちには来てないが」

「いなかったわ。うーん・・・吸血鬼は鼠や蝙蝠や狼、はたまた霧にまで化けれるからなあ・・・」

「腹減ったらその内出てくるさ」

「今さっき食べたじゃない」

「そうだったな」

洗い物を済ませ、ユリックと共にユナを捜すことにした。おい、なに俺の部屋で勝手にゲームしてる、この二人は。咲也とネラプシも連れ、ユナを捜すが一行に見つからない。これは参ったと困り果てていたときだ、ユリックが何かを見付けたのかこちらへ呼ぶ声があった。

「どうした？ 何か見付けたか？」

ユリックが指差す先には窓、しかも開いている。

「こっから逃げたのか」

「違うわ、窓の縁を見て」

俺は窓の縁をよく見てみた、そしてギョツとした、窓の縁には血がびっしりと付いているのだ。

「まさか・・・！これは・・・」

真っ先に反応したのは咲也だった。

「何か知っているのか？」

「・・・ええ・・・私は彼女と直々争うことを想定して助っ人としてネラプシを呼んだの。でもまさかユナが誘拐されるなんて・・・」

「ねえ！あいつは吸血鬼でもお構い無しなの！？」

ネラプシが咲也に問う、咲也は顔を青ざめながらも答えた。

「あいつは可愛ければ誰でも喰う奴よ・・・ユナが危ない！」

咲也は家を飛び出すとどこかへ走り去った。

「どどどどうしよう！」

ユリックはあわめふためている。落ち着け、あいつって誰だ。それに可愛ければ喰う？どんな化け物だそれは。

「・・・とにかくみんな、ユナを捜しましょ！」

俺とユリックは頷き、それぞれバラバラになりユナを捜し始めた。

『十二章 吸血鬼と吸血鬼と吸血鬼と』(後書き)

誤字脱字がありましたら報告をお願いします。

『十三章 吸血鬼と神』

あれから走り回ったがユナの姿はなし、それに手掛かりもない状態である。

「くっ……どうする……」

「お困りのようだな」

背後から声がする、この声は――

「やっぱり、海、お前か」

「フフフ……あの吸血鬼を追い掛けてお前の家を尋ねたときこんな夜だったな」

「なっ……あれ、お前だったのか!？」

「気づかなかっただろ？それより何か捜していたようだが？」

「ああ、そうだ。ユナがいないんだ!」

「ユナ？ああ、あの吸血鬼か。腹が減れば戻ってくるんじゃないのか？」

「飯は今さっき食った。それになんかヤバそうな奴に連れ去られたみたいで……」

「ほう、ヤバそうな奴……それはここ最近この辺りを怖がらせて

いる吸血鬼事件の犯人ではないかな？」

「知っているのか!？」

「いや、知らない。が臭うんだ。血の、何人もの血が混じった臭いが」

スンスンと空気の臭いを嗅ぐ海、何も臭わないが。そして臭いのするほうへ歩いていく、俺はそれに着いていった。

「俺は妖怪だ、鼻は効くさ」

「そうそう、何の妖怪なんだ」

「河童」

思わずポカンとした、河童? 河童と言えばなんか鱗付いた半魚人見たいな――

「それは人の勝手な想像だ龍之介って河童の師でな・・・と言っても知らないか、着いた。この辺りから臭う」

そこはごく普通の一軒家、本当にここから臭うのだろうか。

「血の臭いしかないな、どんな危険があらうとも耐えて見せるんだな」

そう言うとき海は夜の闇に消えた。家に入ろうか悩んでいると向こうから狼が二匹こちらに近づいてくるではないか。何故こんなところに狼が! すぐそばにあった箒に手を掛ける、すると一匹の狼がこち

らに飛びかかってきた！

「ひい！」

箒で撃退も出来ず、尻餅をつく、その上に狼は乗り、口を開けた。恐怖に目を閉じ、食われる！そう思ったときだ。

「キャハハハ！本気で怖がってる！」

どこかで聞いた声だ、目を開けてみると目の前にはネラプシがいた。

「フフ・・・まさか・・・あそこまでビビるなんて・・・ククッ」

後ろにはユリックが笑いを堪えている。

「というか狼は」

「もしかして知らない？吸血鬼は狼にも化けるのよ？」

「言ってたじゃない」

ああ、あの時か。聞き流していた。

「私たちは狼に化けてみたの、するととてもない血の臭い！それを辿ってたらここに着いたってわけ」

「でもただの一軒家ね」

「でも早く行きましょ！あいつはやバイわ！」

「待て、咲也は!？」

「知らない! 先に行ってるんじゃない？」

そう言うと言答無用にドアを開けるネラプシ、鍵掛かってないのか。

家に入ると真っ暗で誰もいないように思えた、だが。

「なんだこの臭い・・・」

むせかえるような血の臭い・・・気持ち悪くなりそうだが耐え、電気を点ける。

「うわ・・・」

思わず身を引いた、そこは血にまみれた廊下が続き、地下に続くであろう階段があった。

「ここね、絶対にこの先だわ」

ネラプシがズンズンと先に進む、何も恐れない度胸が羨ましい。

ネラプシは黙々と階段を降りる、どこまで続くのか、しかし私は彼女を知っている。咲也でも勝てるか分からないような相手だ、だが仕留めなければこの街、いや、この国が危ない。

階段が終わり、また長い廊下が続く。その廊下を真っ直ぐ進むと扉があった、迷うことはない、勢いよく私はその扉を開けた!

そこは床一面、壁一面に広がる血で紅く染まった部屋だった。その

部屋の中央にバスタブがあり、一人の女性がワイングラス片手に浴槽に浸かっている、だが浴槽には湯ではなく血が溜められている。

「あら、ハロー、よくここが分かったわね」

と彼女はワイングラスに注がれた血を飲み干す、天井からは血が滝のように流れ落ちており、彼女は血の滝にワイングラスを傾けた。

「会いたかったわ・・・ユナはどこ!？」

「・・・ユナ・・・ねえ、処女の血を求めて偶然捕まえた吸血鬼のことね? 安心なさい、彼女はデザート、お楽しみよ」

「おい、なんだよあいつは・・・」

輝也が聞いてくる。

「彼女是最狂の吸血鬼と呼ばれている《バートリー》・・・処女の血を求めて何百もの人間を殺してきた化け物よ」

「あら、化け物だなんて。同じ吸血鬼なんだからさあ」

とワイングラスに注がれた血をくいと飲む。

「吸血鬼の血もまた美味しいものね」

と言うと指を鳴らす、すると天井から縛られた咲也が現れたではないか、体からは血が溢れている。

「咲也あ!」

またバートリーは指を鳴らすと咲也は血に染まった天井へ吸い込まれていった。

「バートリー！ユナはどこよ！」

ユリックは言う、バートリーはふうと溜め息を吐き。

「だから安心しなよ、彼女はデザートだからさ」

パチンと指を鳴らす、すると今度は地面から鉄の筒が現れる、そのなかにはユナが縛られていた。

「彼女はこの《アイアンメイデン》でじっくり料理してあげる、だから安心しなさいな」

「ネラプシ！ユリック！ユナと咲也を助けるぞ！」

輝也がそう呼び掛ける、だがネラプシは震えていた。

「どうしたんだ、いつもの強きはどうした！」

「咲也が咲也が・・・」

「くっ、行くぞ！ユリック！」

腕に黒い影を纏う。ユリックは怒りに任せバートリーに突っ込む。が、床一面に広がった血が一人でに動きだし、巨大な拳となってユリックを吹き飛ばした。

「あらあら、私とやりあうつもりね？」

手で浴槽の血を掬い、うっとり眺める。浴槽の血が一人でに動きだし、バートリーを浴槽から出す、そして血はバートリーの体を包み込み、紅いドレスへと姿を変えた。

「っ・・・！」

ネラプシはバートリーを睨み付けた、だがネラプシの前に血の壁が現れる。

「無駄よ、あなたの眼で私は殺せない」

ネラプシは何度も試すがその度に血の壁が邪魔をする。

「お前が圭也の家族を・・・」

「圭也・・・？ああ、あの時の少年かしら？ほんとに彼の妹に用があったんだけどね、邪魔だったからみんな殺したわ」

「そうか、なら友人に代わって敵討ちと行こうか！」

拳を地面に叩きつける、そこから黒い影がバートリー目掛けて噴き出される。バートリーは微動だにしなかった、黒い影は血の壁によって塞がれ、影は消えた。

「神の力を持ったとしても所詮は人間、ね」

バートリーは腕をドリルのように変形させ、こちらに突っ込む。その早さはまさに一瞬だった、黒い影が身を守ったが僅かにドリルの

先端が腹に刺さる。

「ぐう……まだだ！」

体から黒い影を呼び出す、黒い影は針のように尖り、バートリーを次々突き刺す、だがそれは全て血の壁によって防がれた。

「悪あがきは済んだかしら？」

今度は腕を獣の口のように変形させ、ガバアと人一人分丸飲み出来るぐらいに開く。しかし、黒い影がバートリーの腕を貫いた。獣の口は消え、腕からは血が滴り落ちる。バートリーはそれをただ見ていた。

「ふうん、やるじゃん」

バートリーは黒い影を掴むと枝を折るかのように容易く折ってみせた。

バートリーは飛び退くと手を広げ空を仰ぐ、すると部屋中の血は煮えたぎり、紅い湯気が部屋を覆う。視界が悪い、周りは紅く何も見えない。

ヒュッ

何かがこちらに向かってくる音がした、それは紅い血だった。紅い血は縄のように輝也の体を縛る。そして腕をドリルに変化させたバートリーがこちらに歩いてくる。これはまずい、何とかして縄を切らねば、と影を操って縄を切ろうと試みるが全く切れない。ここま
でか……と諦めかけた時だ。

「よくもやってくれたわね」

「輝也は殺させないよ」

ユリックとネラプシがバートリーに殴りかかる、バートリーはもろに拳を受け、吹き飛ばされる。やはり、あの血の壁はバートリーの意思で現れるものであり不意を突かれれば対処仕切れないようだ。

「全く、吸血鬼は目がいいから困る」

口を拭い、ゆっくりと立ち上がり、パチンと指を鳴らした。

ザバア

すると血の床から鉄の筒、アイアンメイデンが現れた、それは縛られた輝也を挟むように開く、なかには鋭い棘が敷き詰められている。

「まずい！」

ユリックがアイアンメイデンを破壊しようとしたが

「死ね、人間」

バートリーが腕を降ろすのが早かった、アイアンメイデンは閉じ、なかの輝也を貫く。

「ぐああああー!!」

中から輝也の悲痛な声が聞こえる。

「あーはっはっはっ！！愚かな人間！貴様らは所詮は食糧に過ぎないんだよ！」

高らかにバートリーは笑う、ネラプシは再び眼を使った、だが床から血が飛び出し眼を封じる。

「ぐう・・・眼が・・・」

拭き取るも拭き取れない、こびりついているように。

「くっ！バートリー！」

ユリツクはバートリーに駆け寄ろうとしたが、床から腕が現れユリツクの足を掴む。ユリツクは転け、地に伏せる。

「そろそろ最狂じゃなくて最強を名乗ろうかしら？オホホホ！」

バートリーはユリツクの頭を踏みつけ笑う、ユリツクはそのバートリーを睨むことしか出来なかった。

ゾクリ

バートリーは嫌な汗が伝うのを感じた。恐ろしい殺気、これはアイアンメイデンからする。まさか、まだ死んでいないと言うのか？

ボコン！

アイアンメイデンになかから拳を叩きつけたような突起が。するとギギ・・・と僅かにアイアンメイデンが開いた、その隙間に指が入

り、中からこじ開け始めた、中からは血塗れの輝也が現れる。

「人間っ！しぶとい奴め！」

一瞬で輝也の元に駆け寄り、腕をドリルに変化させ貫こうとする。だが輝也はドリルを掴んだ、そして

「ぐああああ！？」

焼けつくような音と共にドリルは溶け、腕の部分を包んでいた血は無くなった。

「・・・神ガ負ケル・・・？笑止！」

「人間・・・いえ、今の貴方は・・・」

黒い影が輝也を包み始める、全身を包み込んだ黒い影はまさに人影だった。

「神・・・我ガ名ハ、大禍津日神・・・貴様ニ災厄ヲ見セテクレヨウ」

ガシッと輝也、いや大禍津日神はバートリーの首を掴み持ち上げる、そしてそのまま地面へ叩きつけた。床に溜まる血は噴水のように飛び散り、床にクレーターを作った。

「己ガ起コシタ愚行・・・死ヲ持ツテ後悔セヨ・・・」

腕を退けてみるとそこにはバートリーがいた、まだ息はしているだが体を纏っていた血のドレスは吹き飛びどう見ても戦える状態では

ない。

「・・・何故殺サヌ、アノ女ニ危害ヲ及ボス者ニハ容赦ハシナイ筈デハ無カッタノカ？」

大禍津日神は自分の右腕に問いかける、すると右腕は自分の顔を殴ったではないか。

「・・・成程、貴様ハ慈愛ニ溢レテイル、ダガソレガ甘エデモアル」

黒い影は霧散し、輝也は元に戻ると床に倒れた。腕の拘束が無くなったユリックは輝也に駆け寄る、まだ息はある。

ネラプシも眼に付いた血が取れ、輝也に駆け寄る、すると床からアイアンメイデンが現れた、中にはユナが。そして天井からは咲也が落ちる。

「咲也！咲也！」

「・・・ん・・・ネラプシ？」

「よかった・・・生きてた・・・」

ネラプシは咲也を抱き締めた、咲也はネラプシを撫でてあげた。

「よかった、生きてるわねみんな」

ユナと輝也を抱えたユリックが言う、ネラプシは咲也に肩を貸し、この恐ろしい場所から帰ることにした。

「やれやれ、参ったわね。あんなところで本気だなんて」

暗闇の中、バートリーは逃げるように家を後にしていた。この島国では信仰が絶え絶えになっているから神を恐れることはないと聞いたが嘘だ。酷い目にあつた

「あーあ、次はどこで血を吸おうかしら。それとももう隠居しちゃおうかな」

なんて呟いていると。

「――その前に俺から痛い目に遭うのはどうだ？」

一人の男がバートリーに言う、暗くて顔はよく見えない。

「あら、痛い目見るのはどちらかしら？ 人間」

男はフツと笑うと手の平に球体を出した、その光は辺りを明るくした。

「!!! 貴方は!」

バートリーは知っていた、男は誰なのかを。そしてバートリーの視界は白い光に包まれた。

『十三章 吸血鬼と神』 (後書き)

誤字、脱字があればご報告お願いします。感想等もどんどんお願いしますね。

『十四章 吸血鬼と安息』

あれから数日経ち、いつもの日常？が帰ってきた。傷は癒え何事も無かったかのように腕や足は動く。そんなある日咲也が言った。

「海行こうか」

「今は秋だ、それに吸血鬼だろうが」

「いや泳げないだけで」

「海ったら外だろうが、太陽どうするんだ」

「あ・・・」

「はあ・・・」

「ごめんねー」

「うぜえ。ああ、それはそうとなぜ俺はユナに噛まれても吸血鬼にならなかったんだ？」

「吸血鬼はね、神聖な、神の加護があるものは苦手なのよ、聖水とか聖餅とかね」

「えーとつまり？」

「貴方はマガツチの力を持ってるでしょう？厄の神とは言え神は神。

吸血鬼なんて穢れた存在にはならないわ」

「なるほど・・・神ね」

「海行けないわねえ・・・プールにしようかしら」

コロコロと話題が変わる奴だ。

「室内プールなら大丈夫だな、だけど秋だぞ」

「温水プールでしょ？問題ないわ」

まあ温水プールでも貸切状態だろう、誰が秋にプールに行くか。

「分かった、分かった。じゃあ今週の日曜日な」

「わーい！じゃあユナをペロペロしてくるね！」

と言うと咲也はユナの部屋へ駆け込んだ、待て、あいつなんて言った？ユナをペロペロ？

「ユナあああ！」

「キャアアア！」

遅かった、ユナの部屋から悲鳴が聞こえてくる。勢いよく戸を開ける、そこには咲也に襲われているユナの姿があった。

「やめんか」

コツンと咲也の頭を叩き、ユナから引き剥がす。見ろ、呆然としてるじゃないか、可哀想に。

「おお、神よ！貴方は私たちの恋路を邪魔しようと言うのですか・・・！」

べたな演技をしてみせる。

「邪魔する、それはもう再起不能なぐらいに」

「あ、そこまでしちゃう」

咲也は大人しくなり、俺の部屋でゲームをしだした。俺は放心状態のユナを起こす、ユナは泣き出し俺はそれを慰めた。

「よくも私のユナを泣かせたわね・・・」

部屋からユリックの声がする。

「あら、妹が襲われてるのに助けに来ないようじゃあすぐに盗られるわよ？」

どうやら言い争ってるようだ。

「じゃあこれでどちらが宝を取れるか勝負よ！」

なんだ、ゲームで勝敗を決めようと言うのか？俺は泣き止んだユナを部屋に残し自分の部屋を覗いた。

「ちょ、輝也！これデータ消えてるんだけど！」

電源を点けると画面に表示されたのは0%0%0%の文字、本来そこは俺の努力により100%100%100%なのだ。

「ああ、そのゲームはデータ消えやすいんだよ、てかなんでそのゲームで勝負しようとする、格ゲーがあるじゃないか」

「そうだった！じゃあ格ゲーで勝負よ！ユリック！」

咲也はそう言うのとパソコンの電源を点け、インストールされていた格ゲーをクリックし、始める。俺は放っておこうというわけでユナを連れどこかに出掛けることにした。

すっかり夏の暑さはなくなり、冷たい風が吹く季節になった。

「さみーな、服買っていてよかったな」

清香から貰った服は夏服ばかりだったので冬服を買っておいた、ここで役に立つとはな。

「あら、輝也ちゃんに・・・」

ちょうどそこに清香のお母さんと出逢う、手にはサツマイモの入った袋が。

「あ、おばちゃん。こいつはそのー居候というか・・・」

なんと説明すべきか、妖怪であることがバレれば厄介なことになりそうだ。

「へえ居候、ねえ」

とニヤニヤする、なんだ、別にそれ以上の関係では。

「ま、いいわ。今から神社で焼き芋するんだけど、どう？」

と言うので御言葉に甘え焼き芋を頂くことにした。

鶴野神社はすっかり秋模様になっており、清香のお婆ちゃんが落ち葉をかき集め火を着けていた。

「おお！輝也に――」

「あ、ユナ。つていいいます」

「なんじゃ！婿に入る身と言うのに女がいるのかえ！？」

「お母さん！まだ婿に入ると決まったわけじゃ！」

「ハハハ・・・」

暫くすると焼き芋のいい香りがしてきた、頃合いを見てお婆ちゃんは落ち葉の山から焼き芋を取り出すと新聞紙にくるみ、二人に渡した。

上手に皮を剥くと濃い黄色の中身が姿を見せ湯気が勢いよく立っている。アチアチと言いながら四人は焼き芋を食べる。

「そうじゃ、清香は元気だったかの？」

突然そんなことを聞き出すお婆ちゃん。

「へ？清香・・・」

なぜそんなことを突然・・・

「見知らぬ女と社に駆け込む姿を見りゃ分かるわい、高天原へ行ったのだろう？」

全てお見通しのようだ。

「ええ、元気になってましたよ。それに助けてもらいました」

「それはよかった、ただ気になるのは――」

とお婆ちゃんは輝也をじっと見つめる。

「その暗い、混沌とした禍々しい気じゃ。じゃがその気は決して妖怪のものではない・・・それはなんじゃ？」

まさかマガツチのことを見抜くとは。

「それは・・・」

「いや、言わんでええ。その力をどう使うかはあんた次第、わしゃ口出しせんわ。さ、豊穰の神様に感謝せんとな」

と手を合わせる、俺も手を合わせるがユナだけはしなかった。そうして二人は神社を跡にした。

「フフ」

「何を笑っておる」

「いえ、妖怪を前にして戦わないお母さんが珍しくって」

「わしゃ無害な妖怪は退治せんでの、輝也の妖怪は無害にも無害。あまりにも無害じゃ」

「本当にそれだけですか？」

「や、喧しいわい！家に入るぞ！寒いわっ！」

「ただいまぁー」

「おかえりー、飯」

家に帰ると迎えに来たのはユリックだ。勝敗はどうなったのだろう。

「わーかった、飯な、飯」

「今日はカレーだって」

ユナは買い物袋を見せて言う、ユリックはわーいと喜び部屋へ戻る、どっちが姉だろうか。

「さ、作るか、ユナも手伝って」

「はーい」

着々とカレー作りを進めていく二人、するとユナが

「ねえ輝也」

「なんだ」

「その・・・迷惑じゃないかな・・・？」

「なに言ってる、お前らがいて迷惑だと思ったことはねーよ」

するとユナの顔はパアと明るくなり、恥ずかしそうにまたカレーを作る作業へ戻った。

考えてみればユナは俺にとっての何なのだろうか、ただの居候。で済ますことが出来ない感じもする、だからと言って恋人？ いやそこ

までは・・・だが守るべき人であることに変わりはないな。

そんなことを考えているうちにカレーは出来上がり、ユリックを呼ぶ。どたどたと階段を降りてくると椅子に座り、テーブルに並べられたカレーを食べ始めた。

カレーを食べる吸血鬼二人を見てふと思う、ユナはともかくユリックは血を吸っているのだろうか？深夜に出歩く姿も見ないしそれらしい雰囲気もない。そもそも血なら俺を吸えばよいのではないだろうか、うーむ、よく分からない、直接聞いてみるか。

「なあユリックは血は吸わないのか？」

するとユリックは含み笑いをして答えた。

「さあ、どうかしらね」

「なんなら俺の血を」

「あのね、あんたはマガツチの力を持ってる、多少なら構わないけど貴方の血は毒に変わらないわよ」

「そうか、吸い続けたらどうなるんだ？」

「さあね、死ぬんじゃない？」

「そうか、なるほどな」

「でも・・・輝也の血は美味しかったよ・・・？」

ユナはそう言う、フォローのつもりなのだろうか？ いや別にフォローされるような状況では。

「何よ、人間のくせに」

ユリックは焼きもちを妬いたようだ。

「さて――ごちそうさま」

夕飯を済ませ、自室へ戻ると酷い荒れようだった、これがユリックと咲也の仕業なのは考えるまでもない。

ユリックを呼び出すとげんこつを一つ、そして部屋を片付けさせた。吸血鬼は人間よりも永く生きているのにどうも子どもっぽい。

「ほい、片付けたよ」

綺麗に片付けられた部屋、そしてユリックは立ち去る。しかしその手に持っているものはなんだ。

ユリックを引き戻し手に持っているものを引き剥がした、それは紛れもない俺のエロ本だった。

「何盗むつもりだったんだ！」

「これをカツラにしようと思ったんじゃ」

どこまでも惚ける奴である、しかし言い訳が下手なものには程がある。

「分かった分かった、戻れ」

そう言いユリックを部屋から追い出す、ふとネラプシを思い出した、元気にしているだろうか。少し咲也に聞いてみるか。

携帯電話を取りだし登録された咲也の番号へ発信する、数回のコールのあとに「もしもし」と咲也の声が聞こえた。

「ああ、咲也か。ネラプシは元気か？」

『まるで親ね。元気にしてるわよ、あの娘結構わがままだけど私の前じゃネコだからね』

ネコ？ 一体どういうことだろうか。

『昨日なんか大変よ、ずっとべったり引っ付いて、それから――――』

それから数十分、ネラプシの話を聞かされた。適当なところで電話を切る。わあ、電話代が凄いことに。

しかしこの短い間に色々あった、死にかけたこともあった。だがこのマガツチの力で生き永らえたようだけど、もしかしたら既に死んでいるのでは？ と疑問に持った、だけどこの胸の鼓動は紛れもない生きている証である。

「この力をどう使うかは自分次第、か・・・」

『十四章 吸血鬼と安息』（後書き）

このままだと永遠に続きそうなので一旦区切る。誤字脱字があれば教えてください。

『十五章 吸血鬼と幽霊船』

ある日、咲也から一通のメールが着た。

『連休を利用して私の持つてる島に遊びに行かないか』

なんで俺の周りには金持ちしかいないのか、まあ興味もあるので行くが。集合場所を見るとある港のようだ、船は誰持ちなのか。

そして例の港に辿り着いたわけだ、寂れた港で嫌な静けさが怖く感じる。ユナは海を眺めているが怖いのか余り近づこうとはしない。ユリックには留守番を頼んだ、あいつは出掛けるよりゲームだそうだ。

何もない港で暫く待っていると一隻の船がこちらに向かってきて港に停まった、結構デカイ客船である。船のデッキから誰かが手を振っている。

「おーい！君が輝也君だね！？咲也が待ってますよ！」

「だそうだ、行くよ、ユナ」

カモメにつつかれているユナを引っ張り、船へ入る。中はとても綺麗で軽やかなジャズが流れている。

「やや、御待ちしておりました！ささ、御部屋はこちらです」

デッキにいた男が部屋まで案内する、ドアが沢山並ぶ廊下に出る、何だか遠くで人の声が聞こえる、俺たち以外にも誰かいるようだ。

「ここが御部屋になります。これが鍵で御座います」

男は鍵を渡すと礼をして立ち去った、早速ドアを開けてみればなかなか綺麗な部屋、気に入った。

早速咲也と合流しようと携帯電話を取り出した時だ。

ピリリリ

着信音が鳴る、咲也からだ、手早く携帯電話を開きボタンをプッシュする。

「もしもし、咲也？今船だよ」

『はあ？まだ来てないでしょ？』

「ハハハ、何を言ってるんだよ、立派な客船じゃないか」

『客船・・・？ちょっと輝也！その船なんて名前！？』

「名前？ちょっと待って」

辺りを見渡す、大抵パンフレットが――あった。

「えーとね、《イワンワシリー号》？だってさ」

英語だが何となくは読めた。

『イワンワシリー号？とにかくそれは私の船じゃないわね、早く降

りなさい!』

「むう、そうだな。そうするよ」

通話を終え、部屋から出ようとした、そこで一つのことに引っ掛かる。

あの男、デッキにいた男は何と言っていた? ああ、確か『咲也が待っている』と――――

『イワンワシリー号、出航します』

無機質なアナウンスが流れる、マズイ! このままでは!

しかし遅かった、船はゆっくりと動き出し、港から離れていく。待てよ? 港の場所は間違っていないはずだ、なら何故咲也はこの船に気づかない?

「ユナ、厄介なことになった」

「なあに?」

ユナはベッドの上でうとうとしていた、いや確かに気持ち良さそうなベッドだが。

「乗る船を間違えた、それに俺たちを案内した男を覚えているか? あいつは嘘を言っていた、咲也はここにはいないそれに奴は咲也と俺の名前を知っている」

これはどういうことか、ただ分かることは奴は俺たちの敵。そして最も怖いのは――――

ギリッと奥歯を軋らせる。ここは船、一つの牢獄である、恐らくここには敵しかいない。逃げ道もない。

「クソッ！やられた！」

ドンツとテーブルを叩く、窓を見れば辺りは霧に包まれどっちがどっちなのか分からない状況だった。

どうする？このまま部屋に籠るか？いや、マスターキーやらで開けられてはお仕舞いだ、だが外に出ればまさに四面楚歌、いつ殺されるか。それにこの船は何処へ向かっているのか、霧のせいで進んでいるのか分からない。

「くっ・・・咲也・・・」

携帯電話を開く、だが圏外になっていた。じっとしていも仕方ない、部屋を出てみよう。

廊下に出ると人の騒ぎ声が聞こえる、部屋に鍵を掛けるとそちらへ向かった。

すると両開きのドアがあり、開けてみるとワツと一気に声が大きくなる、ホールのようなだ、大勢の人たちが話し合っている。

「おや、輝也様、どうなさいましたか？」

デッキの男だ。

「この船はどこへ向かっているんですか？」

「この船は——へ向かっております」

周りの声がうるさくて聞き取れなかった、もう一度聞こうとしたが。

「あ、咲也様をお呼びいたしますね」

男はホールをあとにする、暫くして——

「あ、ここにいたんだ！」

そこには咲也がいた。これはどういうことか、咲也は確か、いや、これは偽者か？しかし瓜二つである。

「どうしたの？ボーってして」

「あ、いや、何でも」

おかしい、もしかすると電話の相手が偽者？いやそれだと電話をする意味がない。

「ねえ！デッキに行かない？いい景色だよ！」

バカな、窓の外は霧だったはず。俺は咲也に連れられデッキまで行く、するとどうだろうか、あの霧は嘘のように消えていた。

「これは……一体……」

啞然としていると。

「そうだ、ねえ。輝也のマガツチの力を見せてよ」

何を言っているのか。

「何言ってる、あれはユナを守るための――」

「ユナ・・・？」

確信した、こいつは偽者だ！俺は飛び退き、拳を構える。咲也は首を傾げている。

「なんだお前は！誰なんだ！」

するとニヤリと咲也は口元を歪める、そして体がぐにゃぐにゃとスライムのように動き――

「バレてしまいましたか、これは私の情報不足、不覚です」

あの男だった、こいつはなんだ、妖怪か？

「何が目的だ！なんなんだお前は！」

「まあ慌てないで下さい、私は《ポー》、貴方が持つ神の力を奪いに来ました」

「誰がそんなこと！」

「では力ずくで行きますか！」

ダッ！とポーは駆け寄る、だがその早さは常人。スッと避ける。

「貴方の力が見たい、存分に使ってくださいよ！」

腕が機械になり、殴りかかる。

しかし見え見えの攻撃、避けると拳はデッキにぶつかり、激しい衝撃とクレーターを作り上げる。

「ふむ、シェリダンの真似でもダメですか、なら——」

背中に黒い、烏の羽根が生える。そのまま空を舞い、手の平に光の玉を出す、まさか——

「これはある少年が持つ神の力——灼熱地獄の始まりです！」

その玉を輝也目掛けて飛ばす、だが玉は何か打ち消される。

「何事です!?!」

何かが飛んできた方向を見る、だがそこには太陽が照っているだけだった。

ドッ
ドッ!

次にまた何かが飛んできた、それはポーの羽根を撃ち抜き、ポーを地面へ落とした。

「何が!クソッ!」

「輝也!」

デッキにユナが来る、しかし太陽があるせいでそれ以上は進めないようだ。

「おや、彼女がユナですか。ならば」

手の平に光の玉を作り出し、それをユナに向ける。

「――やめろ！」

反射的に黒い影が現れ、それは棘となり、ポーを貫く。死んだようにぐったりとしていたが

「これが、マガツチの力・・・！素晴らしい！」

ニヤリと笑い輝也を見る。

「実にいい力です！是非コピーしたいところでしたが――」

ゴフツと血を吐く、もう時間はないようだ。

「残念です、当たりどころが悪かった見たいですね・・・ですが！見ていて下さいましたか！？」

空に叫ぶ、誰か見ているのか？

『ああ、見ていた。お前は十分働いた』

どこから声がする、しかしデッキに輝也とポーとユナしかいない。

「有り難き御言葉！」

『ああ、分かった。お前は休め』

ヒュッと何かが落ちてきた。

ドン！

それはポーの真上から降り、ポーを貫いた。

巨大な棒、いや槍だ。

「マガツチの力を持つ者よ——」

その槍のてっぺんに男が一人、立っていた。

「何故お前は神の力を持ち、妖怪を守る？」

「何を・・・言って・・・」

「神と妖怪は相容れぬ、どうしてもな」

「何を言って・・・というか仲間をなんで殺した！」

「仲間？知らぬ、ただ勝手に着いてきた愚者よ」

「テメエ！あんなに慕ってたじゃねえか！」

「だからどうした。という話だ」

輝也が男に向かおうとしたときだ、何か黒い影が動いたかと思えばユナが男に殴りかかっていた。男は平然と拳を受け止めた。

「小娘が・・・調子に乗るな」

そのままデッキへと叩きつける、男は槍を抜くとユナへ向けた。

「貴様の墓標はここだ、永遠の命をここで終えろ」

しかし黒い影が男の腕を掴む、男は黒い影を見ると諦めたのか槍を消し、何処かへ立ち去ろうとする。

「まあいい、またいずれ会おう」

「おい、お前はなんて名だ？」

「・・・俺か？《ポリドリ》だ。ではまたいつか」

スツと霧のように消える、船はゴゴゴと音を立てると方向を変え始めた。

「輝也、大丈夫？」

「大丈夫、それよりユナ！何であんな危ないことを」

「うう・・・ごめんなさい。でも私も何かしなくちゃいけないと思
つて」

「・・・・・・・・そうか、ありがとな。部屋に戻ろうか」

部屋に帰ると急激な眠気に襲われた、抵抗出来ず眠ってしまう。

——也！——也！——輝也！

ハッと名前を呼ぶ声で目が覚める、そこには咲也がいた。

「よかったー、生きてた」

「ここは・・・港・・・？」

「何があったの！？」

「い、いや。確か」

あの船であったことを伝えた、すると咲也は顎に手を添え考え始めた。

「ポーにポリドリ・・・今度はユナじゃなく貴方を狙う奴が出てきたのね」

「ああ、そうみたいだ」

「なんで嬉しそうなのよ」

「いや、俺が狙われるならユナの危険が減るなって」

「・・・呆れた、ユナの為なら死んでも構わないってことね、バカじゃないの？ いやバカね」

「ああ、バカさ」

「はあ、まあいいわ。なるようになれば。ネラプシ、こいつらを船に連れてって」

「はい」

とネラプシはユナを担ぐと港に停まっている小さな船へ運ぶ、輝也はそのあとに着いていく。

「・・・何故助けたの？ 貴方」

太陽が照る空に言う、日傘が邪魔だが。

「なんて言っても答ええないか、何が企みか知らないけど、いいの？ 貴方は人から確実に離れている」

『ああ、構わないさ。今更何を失うか』

何処から声がする、何故出てこないかは言わないが。

「そう、でもね。神に近づいても神に成ることは出来ないわよ」

『いや、俺は現人神と成る』

「ふうん、ま、止めはしないけど」

そう言うとき咲也は船へ向かった。カモメの代わりに鳥がギャアギャアと空を飛んでいた。

『十五章 吸血鬼と幽霊船』（後書き）

誤字脱字等の御報告や感想お待ちしております。そのうちキャラの元ネタ解説とか—————いないか

『十六章 吸血鬼とお泊まり』

我々は一つの島に来ていた、島には館が一つ佇み、カモメが辺りを飛んでいる。

「さあ、着いたわ。ささ、なかに」

咲也は先陣を切ってドアの鍵を外す、なかは綺麗に掃除されており、ついさっきまで使われていたような感じだ。

「さて、もう夕方なんだけど、ご飯どうしようか」

「材料あるなら作るか、無いわけないだろう」

「ああ、確か冷蔵庫に――」

と咲也は冷蔵庫を開け、中身を探索する。ちよつと待て、冷蔵庫に入れているからって無事ってわけじゃあないぞ。

「うわ、全部腐ってる」

案の定全滅のようだ、まあこんなことだろうと材料は持ってきた。

「お、この牛乳、ヨーグルトになってるよ！飲む？」

「お前が飲め、そして苦しめ」

「分かった、飲む」

素晴らしい牛乳パックの飲み口を口に当て――

「待て、バカだろお前は」

輝也は牛乳パックを奪い取り飲むことを阻止した。

「冗談だよ、ジョークだよ」

「ああ、分かったから。材料は持ってきた、カレーでも作るか」

「えー、ハンバーグがいいー」

「えーじゃないだろ、カレーの材料しかねえよ」

「だって輝也のハンバーグ美味しいもん」

不覚にも胸が高鳴った。

「ま、カレーも美味しいけどね」

咲也は鍋を取り出し、用意をする。

「さ、作りましょ」

「それ！爆弾置くよ」

「ちょ、剥ぎ取りちゅーギャー」

その頃、ユナとネラプシは部屋で携帯ゲーム機で遊んでいた。

ユナはユリックも連れていけばよかったと後悔していた、こんなにも楽しいのはいついらいか。

ゲームを終え、部屋で二人は本を読んでいた、結構放置されているであろう館のくせに本は埃を被っていないのだ。

「ねえ、ユナ」

突然ネラプシが声をかける、何？と振り返るより先にネラプシはユナに抱き着いた。

「なな何？」

ユナは突然のことに慌てる。

「フフ：可愛いねユナは」

と首筋をペロリと舐める、ゾクツとしたが振りほどこうにも振りほどけない。

「好きよ、私は貴女のこと…とても…」

普段のネラプシからは考えられない、穏やかな口調だった。ネラプシはユナの肩に噛みつく、傷付けられた肩からは出血し、ネラプシはそれを吸っていく、血を吸われる感覚にユナはボッーとしてきた。

ある程度吸うとユナをこちらに向けさせた、力が入らずされるがままである。ネラプシはユナを押し倒すとゆっくりと服を脱がせ――

「おい」

甘い時間は一人の男によって遮られた。

「何よ、これから『いいところ』なのに」

ネラプシは輝也を睨む。

「じゃあ俺がその『いいところ』を見させてもらうから続けて」

「…用件はなに？」

「飯だ、行くぞ」

「へーい」

ネラプシは仄かに頬を紅く染めたユナを立たし、食卓へ連れていった。その潤んだ目や紅く染まった頬、それらがネラプシを興奮させた。

「可愛いわ、本当に…」

「おい！早くしな！」

「はい！」

そくささと食卓へ向かった。

食卓にはカレーが並べられており、いい匂いがする。席に着くと手を合わし、カレーを食べ始める。

「うめえ！うめえ！」

ネラプシが騒ぐ。

「静かに食えんのか」

「あ、そう言えばネラプシ」

咲也がネラプシに言う。

「貴女、浮気ってどう言うこと？」

ネラプシの顔色が青くなる、ユナとのことだろう。

「そんなホイホイ手を出して…これからは貴女が攻めね？」

「すみませんでしたー！」

ネラプシは床に頭を付けて謝った。

「フフ、じゃあ今夜は少し激しくしちゃうわよ？」

「おい、ちょっと待て、お前は客人がいるなかで愛を確かめ合うとでも言うのか」

すかさず輝也がつっこむ。

「愛に時間も場所も関係ないわ！」

「なんてやつだ」

呆れたのでカレーを食べる。

食事を終え、それぞれの部屋に戻る。風呂はシャワーらしく勝手に使っているようだ。

「さ、誰の部屋に行こうか」

ユナは隣の部屋だ、向かいの部屋に咲也、その隣にネラプシがいる。ネラプシは咲也の部屋だろう、一度扉が開く音が聞こえた。

二人を邪魔するわけにはいかない、ユナの部屋へ向かう。

二回ノックしたあと、ドアが開き、ユナが姿を見せる、暇なので来た。と伝えるとユナは部屋へ招き入れる。

「…」

「…」

会話が始まらない、ユナは無口なやつであり会話をした記憶がな

いな。

「なあユナ」

「なに？」

「吸血鬼は皆あんな感じなのか？」

あんなとは咲也とネラプシのことだ、あれが恐れられてた吸血鬼とは思えないが。

「ううん、私たちは人間と仲良くしてる吸血鬼だけで…人間を食糧としか見てない吸血鬼も…」

「そうか、皆仲良くは難しいか」

少し残念だ。

「で、でも私たちは人間が大好きだよ？」

ユナはぎこちない動きでこちらに歩み寄り、輝也の後ろに着く。

「そ、その…輝也…！」

「…ッ!？」

ユナは輝也の首に噛み付いていた、マズイ、俺の血は毒に等しいものではなかったか？

「お、おいユナ。やめとけて！」

「……ん……美味しい……」

ダメだ聞いていない、血を吸われたせいでだんだん体が痺れてきた、いやいくらなんでも吸いすぎだ、死ぬ、これは死ぬ。

「ちょ、ユナ……そろそろやめないか？」

するとユナは口を離した、半身がビリビリと痺れている。

「どうしたんだ？急に……」

「……分からない……輝也を見てたら急に……その……」

顔は真っ赤になり、俯いていた。

「そうか、でも大丈夫か？俺の血は毒らしいし」

「……うん、美味しいけどちょっと気分が……でも……私は輝也のこと……
……スー……」

ユナは眠ってしまった、気分が悪くなりながらも吸い続けるのは何故なのかは分からなかったが。

俺はユナをベッドに寝かせ、部屋をあとにした。咲也の部屋からは何か声が聞こえる、お取り込み中のような、ソツとしておこう。

部屋に戻り、シャワーを浴びに行く、外は静かな闇に包まれ星がよく見える。

「鳥か」

そのなかに一羽の鳥を見た、闇夜の鳥とはこのことか、全く見えな
い。

シャワー室に入りシャワーを浴びる、セワンワシリー号での出来事
が夢のように思えた。

さっぱりしたあと、部屋に戻りベッドに入る。暫くすると眠気が襲
い、それに任せて眠った。

『十七章 吸血鬼とお別れ』

翌朝、寒い風が吹き、目が覚める。

外はすっかり明るくなり、雀が鳴いている。

輝也は歯を磨き顔を洗うと外に出た、寒い、もう秋か。ボーと海を眺めていると船が見えた、誰だろうか？こちらに近づいてくるな。

咲也の客だろうか？呼びに行こう。と館に入ろうとしたときだ。

「いや、あんたの客だよ」

後ろにはライマーがいた、一体いつからそこに。

「俺に客ってどういうことだ・・・？」

「まあまあ、話してみなよ」

暫くすると船が到着する、俺の命が狙いならライマーがすでにやっているであろう、ではなんだ？

船から一人の男が姿を現す、それを見て輝也は身を強張らせた。

その男はあのセワンワシリー号でのポリドリではないか。

「やあ、また逢ったな」

「何のようだ」

「いや、ちょっとした勧誘だ。なあ、その神の力を使って妖怪を退治しないか？」

「何を言ってるんだ、俺はそんな気はない」

つまりは妖怪を敵にするということだ、そんなことをすれば咲也たちを敵にしてしまう。

「そうか、残念だ。――だが」

ポリドリは槍を握る。

「力は奪うことが出来る、君に選択権は無いんだよ」

「ちょ！争うつもりはなかったんじゃないの！？」

ライマーが止めに入る。

「知らん、気が変わったただけだ」

ライマーは素早く呪文を唱える、すると炎がポリドリを包む。

「早く逃げな！」

ライマーが言う通り逃げるが――しかしどこへ？ここは海に囲まれた島だ。

「ライマーあ！どういことだ！？」

「悪いけど契約違反だ、争うつもりはないと言っていただろう」

「ふん、まあいい。この島もろとも沈めてやる」

炎から突き出た腕はライマーの顔を掴み、地面へ叩き付けた。炎は消え、ポリドリはゆっくりと館へ歩き出す。

ポリドリは館に入るとドアに何かを貼り付け始めた、白い粘土のようなもの、聖餅である。これをドアや棺桶に貼り付ければ吸血鬼はそこから出ることは出来ないのである。

ポリドリは恐らくここにいるであろう吸血鬼を警戒してこの行動を行ったのだ。

「こんなものか・・・」

あれほどの騒ぎを起こしたにも関わらず誰も来ないところを見ればまだ寝ているようだ。

「さて、どこに行った？」

どうする？携帯で誰かに助けを呼ぶか？いや、しかし誰が今頼りになるのか——ダメだ、思い浮かばない。

輝也は今、館の屋根にいた。変に高い屋根だったので地上から見つかりにくいようによじ登ったのだった。

奴が乗ってきた船で逃げるか？ いや、操縦出来ないしキーを抜かれていれば意味がない。

「あいつらを置いていく訳にもいかねーな」

「こんなところにいたの」

素早く後ろを振り返る、そこにはポリドリではなくライマーがいた。

「なんだ、お前か…よく生きてたな」

「解毒の呪文よ、結構苦戦したけど」

「いや違う、あいつのことだ」

「ああ、あいつなら館のなかに」

「なっ…館のなか…？」

マズイ、ユナたちに危害を加えられるわけにはいかない。

「でもどうするの？ 何か策でも？」

直ぐに館のなかへ向かおうとした輝也をライマーは呼び止めた。

「くそっ…！」

「あんたの力でなんとかなんないの？」

輝也は首を横に振る、あれは、ユナを守る為の力だ。

「人間は力を持ってもダメね…」

ああ確かにダメだ、欠点だらけだ人間は…だが弱いからこそ諦めない心が…

「…いや、どうしようもないものはどうしようもないか…」

「そ、諦めが肝心。どう？私の風魔法でなら貴方を逃がすことが出来るけど？」

究極の選択を彼女は言った、ユナたちを見捨て助かるか、ユナを助けようとして死ぬか。

「俺は——」

ユナは目が覚めた、何となく外が騒がしいからである。眠い目を擦り、顔を洗いに洗面所まで行くためにドアを開けようとドアノブを握ったときだ。

ジュウ、と肉が焼けるような音と同時にドアノブを握った手に激痛が走る。

「っう！」

離れた手を見ると手のひらが焦げている、これはどういうことか。蹴り破ろうと蹴ってみるがビクともしない。これは何かが起きている、と同時に輝也が頭を過った、何とかしてここから出なければ――窓だ。

ユナはカーテンを開け、窓を開けようと取手に手をかけたときだ。

「そこにいたか」

窓の向こうに誰かがいた。それは、ポリドリだった。

ドオン！

ポリドリは槍をユナ目掛けて放つ、間一髪ユナは槍を避けた。槍は部屋の壁に突き刺さるとボロボロと土に変わった。

「チッ、惜しい」

舌打ちすると次の槍を構え、こちらに投げようとする。それよりも先にユナは外に出た。割れた窓が体を傷付けたが吸血鬼にとってか

すり傷にも入らない。

「チッ！逃がすか！」

ポリドリは跡を追うがどうにも追いつかない、吸血鬼の身体能力に驚かされた。

槍がユナの寝室を襲った音は当然輝也たちにも聞こえていた。

「なんだ、何があった」

下を覗き込むとユナが走って何かから逃げている様子だった、その少し後ろにはポリドリがいる、迷う必要はなかった、次には黒い影が輝也を包み、一瞬にしてポリドリに蹴りを入れていた。

吹き飛ばされたポリドリは暫くすると起き上がり。

「ようやくその力を使うか…」

「テメエ、ユナをどうする気だ」

「どうにもしない、ただ、お前を誘き出す餌だ」

輝也はポリドリに殴りかかっていた、しかし、目の前に現れた土の壁が輝也を遮る。

「君はもう少し世界を知ったほうがいい」

ポリドリは何かを短く呟く、すると輝也の後ろに甲冑を着た騎士たちが地面から生えるように現れた。

「時に魔法は神をも凌駕する」

騎士たちは輝也を襲う、だが輝也はそれを簡単に薙ぎ倒していく。しかし騎士は次々と沸き出て終わりを知らない。流石に疲れ、動きが鈍ったときだ。

ガッ

ポリドリは輝也を転ばせ、馬乗りになる。

「力は奪うことが出来る」

そう言うときナイフを胸に突き刺した。一瞬の激痛、そして感じる死への道。始めは何が起こったのか分からなかった、だが、胸から溢れ出る血を見て分かった、俺は死ぬのだと。

「さらばだ、君とは分かりあえる気がしたのだがな…」

段々と眠くなる、これが死なのか。それはこの感覚の先にある。どうにも抗えない眠気に俺は目を閉じた。

最後にユナとライマーの声が聞こえた、だけど起きることは出来なかった。

『十七章 吸血鬼とお別れ』（後書き）

誤字脱字等御報告御待ちしております

『十八章 吸血鬼と再会』

私の前にいるのは血を流し倒れた輝也、そして血を流させた本人のポリドリ……………

輝也の体から黒い影が飛び出る。どこかへ飛び立とうとするそれをポリドリは掴んだ。

「これが……神の力！」

黒い影はポリドリのなかへ入っていく。

「くくく……………素晴らしい……………これさえあれば……………っ！」

ポリドリは笑いながら船へ戻る、追いかけるよりも先に輝也だ。

「輝也！輝也！」

動かない、隣ではライマーが呪文を唱えている。

「…ダメ……………高等な治癒呪文でもダメだなんて……………」

「ユナ！何があったの！ドアに変な仕掛けが……………って輝也！？」

咲也たちも駆け寄る、ユナはどうしようと涙を流しているだけだった。その時、ライマーは一つ提案した。

「貴女ヴァンパイアでしょ！？まだ間に合うかもしれない！血を吸うのよ！」

一瞬それで何がどうなるか分からなかった、がそうだ、私は吸血鬼、吸血鬼に血を吸われたものは――！

迷う必要はなかった、ユナは輝也の首に噛みつく、神の力が抜けた
今なら――！

暫く血を吸った、だが輝也は目覚めることはなかった。

私たちは輝也を館の地下にある棺桶に入れ、食卓に集まった。誰一人喋らず、俯いたままである。

「…あの」

そのなか、ライマーが口を開いた。

「…何かしら？」

「一つ…彼を生き返らせる方法があるかもしれない」

全員がその言葉に耳を傾けた。ライマーは続けた

「かつて魔術には生命を操るものがあつた、今じゃ禁術に分類されてるけど…でもそれを使えば…」

「その方法は知ってるの？」

咲也が聞く、ライマーは頭を横に振る。

「一応は知ってる、けど、私の魔力じゃ十分の一にも満たないわ、

協力が必要なの。けど禁術を使えば当然処罰が下る、誰も協力なんて」

「魔力………ね……魔力なら吸血鬼たちにもある。それを使いましょ」

「えっ、でも吸血鬼なんて今どこに散らばっているのか」

「やだね、吸血鬼だって考える。吸血鬼だけが住む街も作るのさ」

暗黒街——吸血鬼だけが住むとされるこの街は意外にも日本にあった、屋根を上手く使い、日陰に囲まれた街は吸血鬼にとって憩いの場である。

「久しぶりに来たわね…」

咲也は何か懐かしむように呟く。

「へえここが咲也の故郷」

ネラプシはキヨロキヨロと辺りを見渡す、すると一人の初老の男が歩いている。彼も吸血鬼なのだろう。

咲也はその男を見るや否やネラプシの後ろに隠れた。が

「隠れても無駄だ、何をしにきた。お前には言うことがたくさんあるぞ」

男は咲也を睨む。

「バレちゃったかー。久しぶりね《ドラキュラ》」

「ふん、突然ここを抜け出したお前が何故帰ってきたか：話してもらおうか」

と、ドラキュラは歩いていく、咲也たちはその後を着いていった。

暫くすると大きな館に着き、重そうな門を開けると紅い絨毯が敷かれた綺麗な内装が目に入った。

食卓だろうか？かなり長いテーブルがある、そこに適当に座るとドラキュラは言った。

「何か用があったのだろう？」

「…簡潔に言うわ、力を貸して」

「……お前がワシを頼るとは…余程のことか、だが――」

ドラキュラは立ち上がると咲也の元へ歩み寄った、そして拳を振り上げると、そのまま頭へ降り下ろした。

「つうー……!?!」

突然のげんこつに咲也は涙目で頭を抑える。

「勝手に出ていった罰だ、どれだけ心配したことか……あれから我々吸血鬼がどれだけ減ったことか……だが無事でよかった…」

「……ごめん、ドラキュラ……」

ここまでシュンとした咲也を見るのは初めてかもしれない。

「では話を戻そう、力を貸してほしいそうだな? 何人必要だ」

「とにかく強力な魔力を持ったの全員」

「…そうか分かった、してその魔女はなんだ」

「…お初にお目にかかります。貴方があのドラキュラですか。私はライマー、私の計画に貴方たちの力が必要なのです」

「……計画、まあよい。お互い人々に忘れられつつある存在だ、協力しよう」

みんなの顔が明るくなる。ドラキュラに島の場所を伝え先に戻ろうと館を後にした。

「たまには帰ってこい、皆待ってるぞ」

咲也たちはドラキュラに手を振り帰っていった。

「…フフフ…まるで家族ね？」

一人の女性が物影から現れる。

「それにしてもみんな可愛い娘ばかりだったわー、咲也もあんなに可愛くなっちゃって」

「フツ、相変わらずだな。《カーミラ》。さあ話は聞いていただろう？準備だ」

「それで、次は何をするの？」

咲也はライマーに言った。

ライマーは輝也の入った棺桶を外に出し、囲むように魔方阵を描き始めた。

「あとは貴女の仲間を待つだけね」

「あの…もし、失敗したらどうなるの？」

ユナはもしものことを考え、聞いた。

「伝承によれば灰になる」

「そんな…」

「安心しな、噂だよ」

「ん…」

目が覚めた、体を起こして辺りを見渡す、霧がかかっており、遠くが見えないがすぐそばに川が流れている、彼岸花も咲き誇り美しいと思った。

輝也はその川のほとりて寝ていたようだ。何が起こったのか分からないうちに。

「お、目が覚めたか」

「うわぁ!?!」

川に停まっていた船から黒いローブを纏い、大きな鎌を持った骸骨

が出てきた、見て分かる、こいつは《死神》だ。

「見たところお前さん、三途の川の渡り賃を持ってないようだからな、あつしが送りに来たのさ」

「…ああ、そうか」

俺は死んだんだ。ここが噂に聞く三途の川か…綺麗、だがこれをユナたちに伝えることは叶わない。

輝也は船に乗る、死神はゆっくりとその船を漕ぎ出した。

ぼうつと霧に包まれた川を眺める。

「おんやあ？ 盆でもねえのに蝶が沢山飛んでら」

死神が空を見て呟いた、輝也も空を見上げてみると綺麗な蝶が羽ばたいている。

「しかしお前さんのような若いのが来るのは珍しいね…この前同い年ぐらいの奴も来たんだわ。やああいつどうしてんだろうなあ…」

「俺と同年…？」

「ああ、見た目は人間なんだわ。けども神さんの力を持つとる奴でー」

間違いない、あいつだ。

「そいつはどこに!？」

「さあ、あいつ何を思ったか三途の川を逆流し始めたんさ。確かに還れると噂があるが源流に近づけば川も荒くなるさ、どうなったかねえ」

「…そうか…」

結局は不明、死んでいるかもしれないし生き返ったかもしれないか…

「しかし…お前さん若いのに悲しまねえな、えらい度胸だ。お前さんみたいな奴は皆泣きわめいていたと言うのに」

「ああ、それは…」

何でだろう、なぜ俺は悲しまない、もうユナたちには会えないと言うのに。

「…着きやしたぜ、お前さんは地獄行きか極楽行きか、判定はどっちかね」

船を陸に停めると船から降り、死神のあとを着いていった。

「ニャー」

そこに黒猫が一匹、死神にじゃれついてきた。

「ひいひい！こら！あっしの体で爪を磨ぐな！《火車》」

「可愛い猫だな」

俺はしゃがみこんで火車を撫でる、火車は気持ち良さそうにゴロゴロと喉を鳴らす。

「とんでもねえ、そいつあ墓から死体を持ってくる厄介な奴でさあ。ほれ、閻魔様はどこにいる」

死神がそう言うのと火車は着いてこいと言うように歩き出した。

暫く進むと三人の人影が見えた。

「お、いたいた！閻魔様あ！魂一つ持ってきた！」

しかし返事がない、何かしているようだ。

「そら！3の二枚！」

「ああ…こんなときに二枚なんて…ついていない…」

「あ、じゃあ革命」

「ぎゃー！1しかねー！」

「閻魔様！なに仕事ほっぽりだして大富豪なんか…」

まさかあの閻魔が大富豪をしているとは、輝也は驚いた。

「すみませんねい…閻魔様にゃ信頼、いや、恋してた奴がいますてねい《ヘル》っつーんだが誰かに殺されちゃって、今じゃあんな風に…今までの威厳は何処…」

死神は目に手を当て、泣き出した。

暫くして大富豪が終わったのか三人は立ち上がり、それぞれ別れた。

「ん、ああ、君か、さてさて判決だ」

「すごい数…！これは十分に足りるわ！」

館に集まった吸血鬼たちを目の前に歓喜の声を上げる。

「じゃあ始めましょう、皆は私に合わせて呪文を唱えて！」

吸血鬼たちは魔方阵を囲み、ライマーは棺桶の前に立ち、呪文を唱え始めた。

俺は今、テレビで見るような法廷に立たされている。被告人の場所に立たされ、目の前には閻魔様がいる。頬杖を付き、何かの書類を見る姿からはとても閻魔様とは思えない。

「えーと、天野輝也……ふんふん、へえ……死因は……え、なにお前殺されたの」

「はぁ……」

「ふうん、いつの世も地上は危険だなー」

「閻魔様……何ですかその適当な態度……」

死神が言う。

「お前こそなんだよ、ろくに仕事しないくせに最近頑張ってる」

「閻魔様がやらないからあつしがやってんでしょーが！」

「……ごめん」

謝ったよ、閻魔様が。

「確かに、俺はあの時から何か抜けていた。こんなのではヘル様は喜ばない、ああそうだ」

閻魔様は何か俯いて眩き。

「《ヤマ・ラージャ》の名にかけ！死者を導こう！お前は極楽行き
！」

アバウトにも程がある、と輝也は思った、しかし極楽行き。これは
よかったのか？

空に暗雲が立ち上る、呪文は終わりそうだった。

雷が落ち、空が光るその時だ。

「禁術―生命の章！死者の魂を現世に還せ！リザレクション！」

ピシャァン！

雷が棺桶に落ちる、吸血鬼たちはその光景をただ見るだけであった。

「よかったな、極楽だよ」

「あ、ああ…」

その時だ、スルリと一本の糸が輝也の目の前にぶら下がる。

「なんだこれ」

「…どうやら、極楽行きでも地獄行きでもないようだ」

ヤマは呟く。

「え？」

「待っている人がいたようだな、お前には。さあ行け、その蜘蛛の糸を昇ればお前は還れる」

「よかったじゃねえか、短い付き合いだったが、じゃあな」

死神は手を振り見送った。輝也はその糸を登り始めた、どうなっているかは分からない、それになぜ俺は還ることが出来るのか、それは――還ってから聞こう。

「さあ、棺桶を」

ライマーはユナに棺桶を開けるように言った。

ユナは不安と期待から震える腕で棺桶の蓋を掴み、持ち上げた。

中には輝也がいた、眠っているようだ。

「…ん」

その輝也の瞼が、僅かに動いたのをユナは見逃さなかった。

成功した、それを確信した途端、膝から崩れ、涙を流した。

「……ここは…」

むくりと体を起こす、周りにはライマー、咲也、ネラプシ、そしてユナが涙を流し喜んでいる、その周りには大勢の吸血鬼たちが歓喜の雄叫びを上げていた。

「……おか…えり…」

涙声で彼女は言った。

「…ただいま」

俺は、泣き崩れる彼女の頭をソッと撫でた。

『十八章 吸血鬼と再会』 (後書き)

よくある展開です。

あとドラキュラとカーミラですが彼らは名前こそそうですが別の吸血鬼です。そう言うことにしてください、お願いします。

『十九章 吸血鬼と帰宅』

あれから、皆大騒ぎ、俺を生き返らせるために呼ばれた吸血鬼たちは帰り、咲夜は祝いと言うわけでワインを持ってきた。どこにあったんだ。

「1000年以上あったらかしのワインよ！」

いやワインは寝かせたほうが美味しいと聞くが限度があるだろう・

さっそくワインを開けた咲也はグラスに注ぎ、呑み始める。ネラプシも先にズルいと言いながらグラスを棚から取り出して呑む。

輝也もグラスにワインを注ぐとクイと呑んだ。

それからだ、そこから記憶が残っていない。

朝、自然に輝也は目を覚ます。辺りを見渡すと散々に荒れていた。どうやら居間で寝ていたようだ。

「やれやれ…」

痛む頭を抑え、体を起こす、その時、体に違和感を覚える。何かと見ると服を着ていなかった。

「なっ！」

それで目が醒め辺りをもう一度見渡す、すると床には同じく服を着ていない咲也とネラプシ、そしてユナがいた。

真っ先に行き着いた考えはあれしかない。輝也は悶えた。

まさか記憶がない間に童貞を卒業！？ いやいやいや！ これは夢だ！ 頬をつねれば…痛い！ 夢じゃない！ 初体験が三人同時に相手とはハードな…俺はなんて高レベルなことを…

などと考えていると。

「ん…頭痛い…」

ユナが目を覚ます、輝也は急いでズボンを履く。

「……………」

ユナはぐると辺りを見る、そして自分が裸だということに気づく。

「あ…あ……………」

ユナの顔がだんだん赤くなっていく。

「キャアアアアア！！」

その悲鳴は島を包み込んだ。

「いやその…覚えていないと言うか…自分でも訳が分からなくてその…」

輝也は悲鳴に目が覚めた咲也、ネラプシに正座をさせられ説教されていた。

「サイテー…私、男に抱かれるなんて…」

ネラプシは涙目だ。

「ま、私が脱がしたんだけどね」

咲也が衝撃発言。

「つてことは俺は冤罪!？」

「ごめん、流れで説教してた」

なんてやつだ…輝也は次に怒りの感情が沸き上がるのが分かった。

「テメー！」

殴りかかったが返り討ちに遭った、何も出来ない。

「今の貴方はただの人間よ？」

ああ、そうだ。皆が言うにはマガツチの力はポリドリに盗まれたらしい、つまり今はただの人間。無力同然。

「ま、どう取り返すか。ね、それに意味もなく盗む訳がない。何かとんでもないことをするはずよ」

「そう言えばライマーは？」

「ああ、貴方たちがぶっ倒れてから帰ったわ。何か調べるらしいし」

「そうか…いつか礼を言わないとな」

なんかかんやで彼女には助けられた、次はいつ会えるだろう。

「さ、そろそろ帰りましょ。船が来るはずよ」

それから帰る為、荷物をまとめ、館を出た。広い海を眺めていると一隻の船が見える、誰が運転しているかは知らないがそれに乗り、船に揺られ始めた。

外を眺めるとカモメではなく、鳥が飛んでいた。

「ただいまー」

無事帰宅、ドアを開けると静かだ、どこかに出掛けているのだろうか？まあいい、取り合えず部屋に戻る。

「っ——」

部屋のドアを開けた途端息を飲んだ。俺のベットにはユリツクが、その隣には見覚えのない少女が裸で眠っていた。いや、見覚えはあった、彼女は自分のクラスにいる若草ワカクサ 楓花フウカではないか。

「なにやってんだ」

俺はユリツクを叩き起こす。

「ん…なに…帰ってきてたの…」

「ああ、帰ってきた、そして早々に問題を持ち込むな。疲れてるんだよ」

「ん…ああ、この娘ね。なかなか気持ちよかったよ」

「そうじゃねえ！誰の部屋だと思ってやがる！」

「分かった分かった、掃除するから」

と、ユリックはティッシュであちこちを拭き始める、シーツも洗わないとな…

しかし何故クラスメイトの彼女がこんなやつに…話したことはあまりないがクラス一の美人であり、気が効く娘で男子からも人気が高い。全ての告白を拒否したらしいが。

「よし、綺麗になった」

とユリックは楓花にキスをする。

そのキスで彼女は目が覚めたようだ、トロンとした目で辺りを見渡す。

「あれ…ここ…」

「おはよう、いい朝だね」

ユリックは棒状のラムネ菓子をタバコに見立て、そんなことを言った。

「あ…確か私…」

自分が行った行為を思いだし顔を赤くする。

「気持ちよかったよ」

さらに顔を赤くする。

「あの一、そろそろ出ていってくれないかな」

「え!?!輝也君!?!」

なんだその顔は、ここは俺の家だ。

「え、や、キャアア!み、見ないで!」

自分が裸だと言うことに気づきシートで体を隠す。

「な、な、なんで輝也君がいるの!?!」

「なんでっていうか、ここ俺の家なんだが」

「ええ!?!そうなの!?!」

まさか無理矢理連れてきたんじゃないだろうな?俺はユリツクを見る、なんでドヤ顔なんだよ腹立つ。

楓花を帰らせ、ユリツクにげんこつを一つ。

「まったく…うちはラブホじゃねえってのに」

っていない。反省する気ないな。

翌朝、輝也は学校へ向かう。この短い間、俺がどんな目に遭ったかを知るものはいない。なんだか切ないような注目を浴びたい気持ちになる。

窓際の、一番後ろの席には楓花がいた。その前の席はかつての友人が座っていた。

輝也はその空いている席に座り、楓花に謝ることがあった。

「やあ、すまなかったな。昨日は、無理矢理に連れ込まれたんだろ？」

「ううん：いいの、あの人とは前から知り合いで：あの、今日放課後、屋上に来てくれませんか？」

「ああ、そうさせてもらうよ」

そういい別れた、こちらにも聞きたいことがある。吸血鬼の彼女とどう知り合ったかだ。

それから時は過ぎ、放課後。日が落ちるのが早くなってきたようだ。暗くなる前に済ませよう、輝也は屋上へ急ぐ。屋上へ繋がる扉を開けると既に楓花はいた。

「遅くなったな」

「ううん、待ってませんよ」

風が強く吹く、寒いな。

「で、聞きたいことがあるんだろ？」

「はい、何故。人間が吸血鬼と暮らしているんですか？」

何を言っているのか分からなかった、何故吸血鬼と分かっている？
それにお前も人間だろう。

「さあな、成り行きだ。…それに今の言葉、まるで自分は人間ではないみたいない方じゃねえか。お前は何者だ？」

楓花はしまった、と顔を変え、暫く考えたあとに言った。

「私は魔女です……って信じてもらえませんかよね」

「いいや、信じる。俺は他に二人の魔女に出逢った、片方になんかは殺された」

「ええ！？殺された？」

不味かったかな、どうやって生き返らせたかは知らないが。

「ああ、色々あってな、今は生きてるが」

「…まあ深くは追求しません。心当たりはありますが…」

「しかし驚いた、まさかこんな近くに魔女がいるとはな」

「私も驚きです。吸血鬼と人間が仲良く暮らしているなんて」

楓花は顔を赤く染め、暫く黙ったあと。

「ユリックさんとは…どういう関係ですか？」

妙に低い声だ。

「いや、ただ一緒に暮らしているだけだけど？」

「そうですか…」

ビシィ！

「なっ…」

輝也の足元にスッパリと何か鋭利な物に切られた跡が残った。

「ないと思いますが忠告です。ユリックさんは私のものですよ？」

ゾクリ、背筋が凍った。その目は光が見えない、ただ暗い黒い目だった。

「あ、ああ…肝に命じておくよ」

冷や汗が出る。

「約束ですよ？破ったら飛ぶのは——」

一瞬、強い風が吹く。その風は輝也の首に切り傷を作った。

血が滲み出る、輝也は今にでも逃げ出したかった、だがやってみろ、その背中を切るぞと言わんばかり威圧感に足がすくむ。

「――！――！」

しかし厄介者に捕まった、これは逆らえないな。

「輝也君！輝也君！」

「え、あ、はい！」

どうやら何度か呼んでいたようだ、考え事をしていて聞こえなかった。

「帰りますよ？風邪ひいちゃいます」

楓花は屋上を後にした。輝也は床に残った傷跡をどうするのか心配になったが普段使われていない屋上だ、大丈夫だろう。

自宅に帰った輝也は夕飯作りに取りかかった。

「ねえ、何かあった？顔色悪いよ」

ユナが心配そうに見つめてくる。ああ、何かあった。恐ろしいことになった。

「ああ、ちょっとな。でも大丈夫だ」

俺はユナの頭を撫でた、ユナは嬉しいのか羽をぱたぱた動かす。

そんなユナを見て不意に抱き締めたい衝動に駆られたが耐える、味噌汁が溢れてきたので火を弱め味見をする。うん、大丈夫だ。

お椀に味噌汁をよそい、茶碗にも白飯をよそうと食卓へ並べユリツクを呼ぶ、暫くしてユリツクは降りてくる。椅子に座るといただきますと皆声を揃えて言い、箸を進める。

しかし、あつと言う間に色々なことがあった。確か、非日常を望んだ日から俺の日々は変わった、それに楽しいと感じる。一度死んだと言うのに何が楽しいのか。思わず苦笑いをした。

「どうしたの？何か楽しいことでもあった？」

ユリツクが言う。ああ、この非日常が楽しいさ。等とは恥ずかしくて言えない。

「いや、何も。ああ、楓花に色々聞いたよ、割りと身近なところに魔女はいるんだな」

「そうかもね、みんな口にしないだけなのかも。今のご時世、私は魔女だなんて言ったら病院行きだわ」

「ああ、楓花のことだが。なんか手を出すなと脅されてね」

「…ああー、あの娘独占欲が強いからねー」

おかずのコロッケを摘む、そうか、独占欲が強いのか。しかし命を奪うと言うほど独占欲が強いとはな。

「ごちそうさまー」

三人手を合わせ言う、その後三人はそれぞれの部屋に向かった。

『十九章 吸血鬼と帰宅』（後書き）

新キャラの若草楓花です。魔女です、見た通り使う魔法は風、好きな相手を自分のものにするならば手段を選ばないようなやつです。

誤字脱字等あればご報告ください。あと感想やレビューもよろしければ。

『二十章 吸血鬼と日常』

朝——私は起きる、本来この時間帯に吸血鬼が活動するのは稀だが、私はなるべく人のように生活をしたかった。

階段を降りると彼が「おはよう」と笑顔で言ってくれた。

「おはよう！」

何故だろう、それがとても嬉しかった、一度彼が死んだときはありとあらゆる彼との記憶が頭のなかを巡った。恐れたのだろう、彼を失うことを。

私は彼が作った朝食を食べる。彼は学校があるらしく家を出た。学校——それは知っていた、だが人間が行くべき場所であり、私たち吸血鬼がともに行くことが出来る場所ではない、直ぐにヴァンパイアハンターが来るだろう。

私はそのとき初めて吸血鬼であることを悔やんだ。人間たちが楽しそうに日の下を走り回る姿を見て羨ましいと感じた。そんな私を姉は優しく抱き締めた。

「なにボーっとしてるの？」

ふと気がつけばユリックが私を後ろから抱き締めていた。

「え、あ、考え事を…」

「ふーん？そうには見えなかったけどなあ？」

チュ

ユリックはユナにキスをした。

「うん、美味しい味噌汁の味。もっと味わいたいわね」

もう一度キス、今度は舌までも入れてくる。

「んう……あ……お、お姉ちゃん……」

「ふふ……可愛いわあ……ちゅぽ……」

濃厚で永遠に続くかと思われた時間はインターホンによって打ち消された。

「あら、誰？ 私たちの甘い時間を邪魔するのは」

「あ……もしかして」

ユナには心当たりがあった、この前、ネラプシと約束事があったのである。

「はい」

玄関に出てみると日傘をさしたネラプシがいた。

「よっ！ 朝ごはん食べた？」

「今食べてる、もう少し待ってー」

私は急いで食卓に戻り、朝食を食べる。服を選び着込むと日傘を手にして外に出た。

「さ、どこ行く？」

ネラプシと私は歩きながら会話した。

「んー…特に決めてないなー」

ネラプシと何処かに出掛ける約束をしていた、本当に『何処かに』だが。

取り合えず歩く、何か気になるものがあればそれに立ち寄ろう。

「ああ、そうだ。本が欲しいんだった！」

ネラプシは叫ぶ。

「じゃあ行く？」

「うん！行こう！」

手を引っ張られ連れていかれる、着いた先は本屋、なのだが売っている本がどうも特徴的だ。

薄いのだ、薄く大きいその本は一冊で500円近くはする。どれだけ高価なのか。

「ねえ、なんか高くない？」

「んー？こんなもんよ、同人誌なんて」

既に何冊か取り出しているネラプシが言う。

「同人誌…？」

「ああ、知らないの？なんというか自主製作の漫画…？って言えばいいのかな？私はこの作家さんが好きかなあ」

と、棚から取り出した同人誌は『ヴァンパイアキッス』と言うタイトルだった、ユナはその表紙を見た。

「きゃっ！？」

思わず目を背ける、がもう一度表紙を見る。

その表紙は羽の生えた…タイトルからして吸血鬼だろうか？吸血鬼の少女二人が裸で抱き合っているのだ。これは刺激が強い、棚に戻そう。

（…でも…）

多少中身が気になる、好奇心がこんなところで沸くなんて。

「おーい！行くよー！」

ネラプシが呼んでいる。

「え、ああ！今行くー！」

買ったちゃえ。と言うことで初めて同人誌なるものを購入した、お金は貰っていたが初めての買い物はこれとは。

「たくさん買ったねー！」

ネラプシは袋いっぱいに入った同人誌を眺めて言った。

「ちょっと休憩しようか？」

広場に向かう。丸い形をしており中央には噴水、周りにはベンチが設置された広場に行き、二人はベンチに腰をかける。

「いやー疲れたねえ」

「うん」

時計はもう正午を指そうとしていた。

「ねえ、ユナ」

「ん？」

呼ばれたので振り向いたときだ。

チュッ

ネラプシの唇がユナの唇と合わさる。

「――！？」

混乱するユナを他所にネラプシは舌を入れ、ユナの口内を舐め回す。

「ん……こ、こんなところで……」

なんとか抗議した、するとネラプシは唇を離す、光る糸がネラプシとユナを繋げていた。

「ふふ……大丈夫よ。ここはカップルがよく来る広場だもん」

「そ、そんな。カップルだなんて……私たちはただのお友だ――」

言い終わる前にまたネラプシがキスをする。

確かに数人、カップルがベンチでイチヤイチャしているが……私たちがのように深い愛し方はしていない、これは浮く。

案の定周りから注目を浴びる、恥ずかしい。抵抗しようにも戦闘慣れしているネラプシに力では敵わない。

ああ、なんだか眠く……気持ちよくなってきた……

ユナは目をトロンとさせ、ネラプシにされるがままである。

「ん……ちゅ……んあ………ふふ……可愛い顔……」

ネラプシは悪戯っぽく笑うと、今度はユナのスカートのなかに手を入れた。

「ちょっと！はしたないでしょ！」

そこに知らない少女が、年は輝也と変わらない…というか輝也の学校の制服ではないか。

「ん？なあに？私たちの愛を邪魔する気？」

「いや、邪魔というか。別にそれはいいんだけど場所をね？」

ネラプシが辺りを見渡すとそこには人が集まっていた。

ネラプシはつまらなそうな顔を見るとボーっとしているユナを引っ張り。

「そうね、場所を選ぶわ。じゃあね」

すぐにその場を離れた。

「ったく……恥じらいがない」

「おうい、いたいた」

人だかりの中から輝也が姿を現す。

「ん、ああ迷子になったかと思いましたよ」

「酷いな、突然走るからだろ」

息を切らしている彼を他所に彼女、楓花は何かを探す。

「どこに行ったのかしら…」

「ところで何を探しているんだ？」

「剣です。風のルーンを刻んだ剣」

「剣！？どうやって落とすんだよ」

「普段はキーホルダーみたいなもの何です、魔力を注げば誰にでも簡単な風魔法が使える剣で…貴方にあげようと思っていたんですけどね」

「魔力なんて持ってねーよ」

「持ってますよ、誰でも。気づいていないだけなんです。んーないな……」

「今は諦めようぜ、休憩時間が終わるぞ」

「……しょうがないですね…」

しぶしぶ楓花は諦めることにした。

「そう言えばなんで突然走り出したんだ？」

「ええ、あそこのベンチで吸血鬼二人がイチャイチャしてたんですよ」

吸血鬼二人……？いやまさかな。

「へ、へえゝ吸血鬼二人ね……」

いやでも彼女たち以外にいるかもしれない。

「なにそれ？」

家に戻った二人は同人誌を読んでいた、その最中ネラプシはあの広場で拾ったものを見せたのだ。

一見剣のキーホルダーだ、よくお土産売り場にありそうな。

「…これ、僅かに魔力を感じるのよね…」

まじまじと剣を眺めるが、「ま、いつか」とその剣をポイと投げ同人誌を読み始める。

ユナも買ってきた同人誌のページを開く、途端に顔が赤くなった。始めのページから濃厚である。

『二十章 吸血鬼と日常』（後書き）

誤字、脱字等のご報告お待ちしております、あと感想、レビューもお気軽にどうぞ。

なんとなくキャラ説明

名前…天野輝也

性別…♂

種族…人間

普通の高校生、吸血鬼が好き。家事はわりと出来る。
名前を考えるのは大変です、全然思い付きません。

名前…ユナ

性別…♀

種族…吸血鬼

ヴァンパイアハンターから逃げてきた吸血鬼。それなりの魔力はあるが戦闘をしたことがないため使うと制御が出来なくなる。人に憧れを持つ。

名前の由来は小説『そして誰もいなくなった』のUNオーエン夫妻から。

『二十一章 吸血鬼と仮装祭』

今日は10月31日——これだけで分かる人もいるだろう。そう——全く行われることがないイベント、ハロウィンだ。

まず謙虚な日本人が他人の家に仮装してお菓子を貰いにいくなど想像出来ない。

だが——仮装する必要のない彼女たちは……

「トリックオアトリート!」

夜、チャイムが押されたので玄関に出てみるとネラプシがいた。

「何のようだ」

「もー、今日は何の日が分かってるの?」

「……ハロウィンだが?」

「そうハロウィン! お菓子渡さないと悪戯するぞー!」

ガオーと獣の真似をする。

「はぁ、分かってるなら仮装ぐらい……まさか…」

「仮装なんて必要ない！デフォルトで吸血鬼だもん！」

もしかしたらハロウィンは妖怪たちが楽しむイベントかもしれない。そもそも人間が本来恐れるべき者に仮装する必要が分からない。

「分かったよ、ほら」

といい俺は酢昆布を渡す、当然ネラプシは文句を言う。

「じゃあ悪戯でもしろよ」

半ば呆れて言った、ゲームの途中なんだ。早くしてくれないか。

「分かった！悪戯するわ！」

と言うと家のなかへ入っていく、階段を上がり、俺の部屋に入る。何をするのかと見ているとなんと俺が隠していたエロ本を見つけ出したではないか！

「おい！それをどうする！」

「ふーん、『エロエロ吸血鬼少女』『妹は吸血鬼！』『吸血鬼とエツチ』ねえ…」

「おいやめろおおお！！」

なんてやつだ。俺はネラプシからエロ本を取り上げる。

「こんな本を持っている男の家にユナは置いていけないわ！私が預かる！」

いやこいつのところに預けても危ないだろう、主に貞操が。

「分かった！分かったから！余ったドーナツやるから！」

俺は余ったドーナツを渡し黙らせた、しかしエロ本の件をユナとユリックに話された、親にバレた訳でもないのに家を出たい。なんだこの気持ち。

ユナは顔を赤らめユリックの後ろに隠れる、ユリックはそのエロ本を貸すように言ってきた、こいつはどうしようもない変態だと思う。貸したけど。

さて、奴が来たと言うことはあいつらも来るかもしれないと言うことだ。

ピンポーン

ほら来た、魔女か吸血鬼だ。しかし厄介だな、何も用意していない。取り合えず玄関に出る、そこにはやはり魔女がいた。

「やっぱり来たか、若草」

「やっぱりって…他にも誰か来たんですか？」

「ああ、吸血鬼がな。ひどい目にあった」

「…やっぱり貴方は普通じゃないですね」

「ああ、普通じゃねー。実は宇宙人！」

と、一つ冗談を交える。

「ええ！？う、宇宙人だったんですか！？」

あれ、本気にしてる？

「な、なんてこと！これが宇宙人とのファーストコンタクトだなんて！」

「あ、あの…」

「ええと…まずは侵略が目的なのかどうかを…」

「ちょっと待て！嘘だ！」

まさかこいつがここまで騙されやすいやつだとは思わなかった。

「え？嘘…？嘘…ついたんですか？」

ん？なんだか若草の目付きが険しく…

「私…嘘は嫌いなんです…」

恐ろしく低い声、輝也はマズイことをしたとすぐに分かった。

「あ、そのすまなかった。まさか信じるとは——」

ビシィ！

無詠唱で放った風魔法は輝也のすぐ横にあるドアを傷つけた。ナイフか何か刃物で切りつけられた後が残る。

「あわわわ……ゆ、ユリック！来てくれ！」

顔面蒼白、輝也はすぐにユリックを呼んだ。

「ん？なあに？」

すぐにユリックは来た。ユリックの姿を見た途端楓花は泣き出し、ユリックに抱き着いた。

「どうしたの？何かあった？」

ユリックはよしよしと楓花を撫で、慰める。

「うぐっ……ひっぐ……嘘ついてきたの……」

楓花は輝也を指差して言う。

「ごめんね？私からも叱っておくからね？」

「うん……ありがと……」

なんだこれ、俺が悪い雰囲気。いや嘘ついたのは俺だが。

「どうするの？どう責任取る？」

うう、女は怖い。

「分かった、何をすれば許してくれる？」

「うーん…お菓子…」

「え？」

「お菓子が欲しいです…」

「う、うん。分かった…」

そんなものでいいのか？と拍子抜けした。取り合えずお菓子がある程度渡すと笑顔で楓花は帰った。

「貴方も騙されやすいのね」

ユリックがそう言うので何故？と聞き返す。

「嘘泣きよ、お菓子欲しさに嘘をついたの。あの娘自分の為なら手段を選ばないけど少しやり方が不器用なのよねえ。ま、可愛いからいいけど」

なんて奴だ、見事に乗せられた。

「それはそうと。トリックオアトリート？」

「お前もか、ほらよチョコ」

「トリックバットトリート！」

「おいセコいぞ！」

ユリックは俺を押し倒すやいなや肩に噛みついてきた。

「おいおい、俺の血は毒だぜ？」

「あら？神の力は盗まれたってユナが言ってたけど？」

知っていたか、しかしなぜ突然血を吸い始める。

「…ん…ちゅ……」

溢れ出る血を喉を鳴らして飲み続けるユリック。待て、今は神の力が
がない。吸血鬼になってしまう！

「ちょ、ちょっと待った！俺、吸血鬼になるんじゃないか！？」

「あら？成りたいの？なら魔力を注ぐけど」

「えーと、魔力を注がれたら吸血鬼になるの？」

「そ、むやみやたらに吸血鬼を増やす訳にはいかないしね」

と言うとまた血を吸い出す、失血死だけは勘弁だ。

「ん、ぷはあ。ごちそうさま」

口元に垂れる血を拭うと笑顔で言った。

「…はあ。つたくなんで突然…」

結構吸われたようだ、体のあちこちが痺れる。

「定期的に血を吸わないとね、吸血鬼としての理性が抑えられなくなるの」

「理性がなくなったらどうなるんだ？」

「治まるまで血という血を吸い続ける」

これはなんと恐ろしい、これなら俺の血を捧げたほうがマシではないか。

「じゃあユナは？」

「あの娘は結構我慢するからね、でも吸わずに済むとは限らないわ」

俺は自分の部屋に戻る。

部屋にはユナがいた、俺の姿を見たユナは顔を少し赤らめ、漫画に視線を移す。

無理もない、あの時のエロ本だが、表紙の吸血鬼っ娘がユナそつく

りだったのだ。というかユナにそっくりだったから買ったというか。これじゃまるで俺がユナのこと好きみたいな……………

……好き…………？誰のことを？

いや、確かに吸血鬼は好きだ。かと言ってユナは俺にとって……………
…俺にとってどういう存在だ？守るべき相手？家族？はたまた他人？
いや、違うこれは片想い…………？

チラリ、とユナのほうを見る。愛くるしい顔立ち、綺麗な金髪、紅い目。いかんいかん、意識してしまう。しかしこの胸の高鳴りは確かに恋である。こんな小さな娘に恋とは。

「なあユナ」

「なあに？」

「…いや、何でもない」

「ん…」

なんて気まずい、ユナは恐らくエロ本の件で俺のことを恐れているはず。

「ねえ…輝也」

「ん、なんだ？」

「その…吸血鬼には我慢出来ないときがあるのを知ってる？」

「ああ、さっき聞いた。面倒だな、吸血鬼は」

「…うん、でね…」

ユナの様子がおかしいな、さっきからガタガタ震えて、顔も紅い。

「血を…吸わせて！」

返事を言うまえにユナは俺をベッドに押し倒すとすぐに肩に噛みついた。二度目の吸血である、まずいな死ぬかも。

「…ん、傷跡？」

「ああ、さっきユリックにな」

「……お姉ちゃんはあちこちに手を出すんだから…」

ユナは本能のままに血を吸う、そのユナが見えず、恐怖した。そうだ、仮にも吸血鬼だ。

「……美味しい……」

「へへ、そーかい」

まずいな、体が痺れてきた。

「な、なあ。二人に血を吸われると流石にキツイ…」

止めるように言うが。

「.:すう」

ユナは満足したのか眠っていた、その愛くるしい寝顔を見ると抱き締めたくなる、が起こすのはまずい。

ちゅ

口元を伝う血を舐めとるようにキスをした、そして顔が一気に赤くなる、何をしているんだ俺は！ああ恥ずかしい！寝よう！寝てしまおう！

とユナと一緒に布団を被る。そして数時間後――――

眠れん、あれから恥ずかしさと興奮が治まらず寝ようにも眠れない。

「くそ、とんだハロウィンだ。悪戯ばかりされた」

愚痴を言うがその口元は笑っていた、楽しくて仕方がないのだ。今の今までこう、家で楽しむことがなかった。そう、家族のように。

『二十一章 吸血鬼と仮装祭』（後書き）

誤字、脱字等あればご報告お願いします。感想レビューも遠慮なくどうぞ。

意味もなくキャラ紹介

夜須 圭也

性別…♂

種族…現人神

八咫鳥の力を持った人間、悪を排除するために戦うが…

現人神は人でありながら神と祀られる者や神の子孫を指す。明治天皇などがそうである。今作では神の力を持った者を現人神とする。

名前の由来は輝也の第一候補の名前。

桜花 咲也

性別…♀

種族…吸血鬼

随分昔から吸血鬼の少女、推定年齢四桁。

姿は女子高生なので高校生活を楽しんでいる。暗黒街に住んでいたが抜け出した。

名前の由来は特になし

『二十二章 吸血鬼と魔法・前編』

ここは或場所——薄暗い、機械に囲まれた場所に一人の女性がつまらなそうに雑誌を読んでいる。周りには魔術師が沢山並び、それぞれ得意とする属性の呪文を唱えている、魔術師たちが取り囲むのは小さな石。雷や火、水に打たれても壊れることはない。

「はあ」

女性はその石を見てため息。

変わらない、何も変化が見られない。これに何か意味があるのなら無意味という意味だろう。

「まったく、あの方も適当だ、どこかに行くし」

辺りを見れば昼寝をしている魔術師やポーカーをしている魔術師、このパソコンで動画を見ている者もいた、今あの石に魔術をかけているのは暇潰しに飽きた者たちだ。

「やあやあ、どうかね。調子は！」

そこにこの状況の元凶である彼が帰ってきた。

「どうかね。じゃない！勝手にどこかに行くな！ポリドリ！」

「はっは！そう怒るな《バイロン》」

「なんだ、やけに上機嫌だな。気味が悪いぞ、いつもだが」

「なあに、魔法よりも不可解なものを手に入れたのさ」

ポリドリは黒い影のようなものを風船のように持っている。

「なんだそれは、不気味だな」

「ああ、禍々しい、だが神々しい。これは神の力だ」

「ハッ、神の力？お前に信仰心なんてものがあつたとはな」

「これは実験を進歩させるに違いない」

「…ポリドリ、お前が何を作ろうが私は止めようとはしないが、お前は何を求めている？」

「……答えは単純明解、永遠の時だ。今作っているものはそれを可能とする。さあ早くこれを試そう、楽しみでうずうずしている」

はあ、とバイロンはため息を吐く。しかしこれで研究が終わる、それならよい。

一方輝也たちは。

「さあ！今度は私と！」

咲也は口に棒状のお菓子をくわえて言った。

今日はそのお菓子の日、別にこれと言って特別な日ではないが何処かの誰かがそのお菓子を両端から二人で食べる、と言ったゲームを考えたのだ。咲也はそれを実行している。

「おいおい、寸止めするゲームじゃねえのかよ…」

ジリジリと輝也を後退り、他の皆はと言うと咲也の深いキスにより恍惚の表情を浮かべ、その快感に酔っていた。

「さあ！追い詰めたわ！」

部屋の隅に追いやられた輝也にジリジリと詰め寄る。

「観念なさい！」

そして輝也に飛びかかる、お菓子の端が輝也の口に入ると物凄い早さで食べていき輝也の唇に到達する。

そしてそのままキスをする、が輝也だけは違った。唇を噛み、血を吸い始めたのだ。

凄い勢いで吸いとられる血液、すぐに貧血になり、輝也は倒れた。

「ん…」

暫くして目が覚める、頭が痛い。確か血を吸われて…気を失っていたようだ。辺りを見渡すと咲也たちがゲームをしている。

「まったく…自由な奴らだな…」

ふと見ると小さな剣のキーホルダーが落ちていた、こんなもの買った覚えがない、だが楓花がこれに似た物を探していたのは覚えていた。

「なあ、これどこで拾った？」

輝也はキーホルダーを拾い、吸血鬼たちに見せる。

その時だ。

カッ！

「うわ！なんだ！？」

剣が輝き始めたのだ。

「何が…」

光が収まる頃にはキーホルダーは、一つの剣へと姿を変えていた。

「うわあ、そんな機能があったのね」

ネラプシは興味津々に剣を見つめる。

「間違いねえな、これ、若草が探してたやつだ」

「へえ、探してたんだ。私たちがイチチャイチャしてた時に見つけたんだよね」

そこまで言って、ネラプシはハッと口を抑える。

「へえ…イチチャイチャねえ…」

咲也から怒りのオーラを感じる、ネラプシはアワアワとあわてふためき逃げ出す、しかし咲也のほうが早かった。ドアノブに手をかけようとするネラプシの前に仁王立ち。

「さあ！観念！」

ピンポーン

そこにチャイムが鳴る、輝也は急いで玄関に出た。

「ん、珍しいな」

そこにはライマーがいた。

「ああ、そうだ。お前には礼があるな、ありがとう」

命の恩人が何をしにきたのか？

「いや、私も必死だった。それよりポリドリに動きがあった」

「なるほど、それで俺たちは何をすればいい？」

「話が早いな、とにかく奴の計画を阻止するんだ、これは雇われ屋がすることじゃあないが」

「いや、いいんだ。今度は俺が雇われよう。ポリドリはどこに？」

「私が案内する…がお前、今は神の力がないんじゃないのか？」

ああ、そう言えば……いや、待て、武器ならある。

「そうだ、これを見てくれないか？」

輝也はポケットからあのキーホルダーを取り出してライマーに見せる。

「これは…風魔法の魔導具ね、どうしてこれを？」

「友達に貰った、いや拾ったが正しいかな」

「…へえ、お前は人間なのに不可解なものと接触しやすいんだな」

ライマーはじっと輝也を見つめ。

「いや、その魔力。お前、ただの人間では無さそうだな」

「おい、どうい——」

「まあいい、早く吸血鬼たちを連れて行くぞ」

それから、輝也はユリツクを呼んだ。他三人には黙っておく、迷惑をかけたくない。

「一人でいいのか？ま、少ないほうが潜入しやすいな、よろしく、私はライマー」

「めんどろだけど、姉として戦果を見せないとね、ユリツクよ」

二人は握手するとライマーが先に歩き出す、二人はそれに着いていた。

『二十二章 吸血鬼と魔法・前編』（後書き）

誤字脱字等あれば報告お願いします、感想レビューもお願いします。

モチベ上げるためのキャラ紹介――

名前…ライマー

性別…♀

種族…魔女

火属性を得意とする魔女。雇われ屋をしているが成功例はあまりない、が彼女自身はあまり気にしていない。一度は敵だったが雇われていた為、輝也を助けたのは本性か。

元ネタは小説『吸血鬼ヴァーニー、血の饗宴』の著者、ジェイムズ・マルコム・ライマーから

名前…ストーカー

性別…♂

種族…妖怪（河童）

研究熱心な河童、その熱心さはユナを襲った。故郷では機械屋を営んでいたがいつの日か人間の世界に住むようになった。人間とは古くから仲良くしていたようだ。機械屋を営んでいた為機械には詳しい。胡瓜は好き。

元ネタは小説『吸血鬼ドラキュラ』の著者、ブラム・ストーカーと

『二十三章 吸血鬼と魔法・後編』

あれから暫くして、一つの家に着いた。

「この地下よ、この地下にポリドリはいる」

辺りを見渡し、家に入ると地下へ続く階段があった。

警戒しながら階段を降りていくと突然広い場所に出た、やけに騒がしい。

「ここがポリドリの基地のようね…あなたたち、準備はいい？」

「ああ」

「ええ」

二人は返事をする。

「まずポリドリの計画を阻止するには中枢にあるものを潰す必要があるわね」

「中枢に何があるんだ？」

「ポリドリの魔法実験室、そこではあるものが作られている」

「あるもの？」

「そう、《賢者の石》よ。それは今は何も起こっていないけどお前

から神の力を奪った。これは不味いわ」

「そうか、ならその賢者の石を潰せばいいんだな」

「ああ、神の力を使われる前に早くな」

「ちょっと待って」

そこにユリックが言う。

「どうやって中枢まで行くの？この騒ぎ様から結構な敵の数だけど」
そう言われればそうだ、堂々としてきた上に大勢の人がいる、この先を進めば袋叩きだろう。

「いや、大丈夫だ。これを」

とライマーは黒いローブを取り出し、被るように言う。被ったが変装になっているのだろうか。

「私は何回か侵入してるんだけどね、ここにいるやつらは各所から集められた魔術師、お互いが全員の顔を知っているような関係ではないわ」

なるほど、それっぽい格好をしていれば怪しまれることはないか。ザルだなおい。

そんなことでローブを被り、真っ直ぐ進む、他にも扉はあるが声は真正面からする、突き当たりにある一つの扉を開けると一気に声を大きくなった、辺りには魔術師たちがポーカーや昼寝をしている、

その中央辺りには何か光ったものが浮いている、その光ったものを囲むように魔術師が立っている。

「ここが？」

「そ、ここが中枢、あの光ってるのが賢者の石」

声は抑えずに言う、というか抑えていたら聞こえない。例えるならゲーセンのような騒がしさだ。

「さて、問題はどうか壊すか、だ」

「普通には壊れないか、やっぱ」

「ああ、それも一発で確実に壊す必要があるな」

ライマーはキョロキョロと辺りを見渡す。

「…ふむ、魔法装置か」

「魔法装置？」

「あの賢者の石は魔法がかかった機械で維持されている、それを壊せばなんとかなるかもな」

「なるほどじゃあ——」

その時だ。わあ！と辺りの声が一段と大きくなる、何事かとみんなが注目する方を見ると、そこにはポリドリがいた。

「やあやあ、遂にこの賢者の石が完成するかもしれない。この神の力で」

と手に持つのはマガツチの力、輝也は思わず一步步きそうになったがユリックが止めた。

「さて、神の力を入れたい！が、その前に……」

とポリドリは何か短く呪文を唱える。

ピカッ！と光が迸ると魔術師たちは白く光っていた。そして輝也たちは光っていなかった。

「まずは、その侵入者を血祭りにあげろ！！」

なんてことだ、バレていた。魔術師は一斉に輝也たちを取り囲み、呪文を唱える。飛び交うファイヤボール、風の刃、ゴーレム、氷の矢。ユリックは全て避けてみせる、ライマーは力任せに火で焼き尽くす、輝也は風の剣で応戦するが圧されている。

「まったく！数が多いな！」

ライマーは息を切らして言う。

「輝也！足引っ張らないでね！？」

「ああ、すまねえ！」

再び戦闘を始める。

「なんだよあいつ……人間の癖につえーぞ」

魔術師たちはその強さに次々と倒されてゆく。

そして最後の一人、三人全員で飛び掛かる、が。

ザパァ！

三人の前に現れた水の壁がそれを遮った。

「へえ、貴女は手練れのような」

「ライマー、お前が私に勝てるか？」

不敵に笑うのはバイロン、何か勝機があるようだ。

「これはマズイね、私じゃ勝ち目がない」

「何でだ？散々倒したじゃないか」

「あいつの得意な属性は水、私は火、ここまで言えば分かるだろ？」

ああ、なるほど。じゃあどうするか。

「逃がさないよ！」

三人の足に水が絡み付くと氷へと変化した。

「ぐ、くそ！」

逃げることも敵わなくなった、三人はバイロンを睨む。

「そう睨むな、一瞬で頭を吹き飛ばしてやる。ああ、その吸血鬼は心臓に杭を打たないとな」

手のひらに三本の氷柱を作り出す。

そしてそれを頭と胸に突き刺そうとしたときだ。

ビー！ビー！と警告音が鳴り響く。辺りの機械のモニターにはCAUTION！と文字が流れている。

「何事だ！」

バイロンは近くのパソコンへと向かう。

「……くっ！燃料室に巨大な熱反応！？ポリドリ！逃げるぞ！」

「……ああ、何を言っている、もうすぐだ、もうすぐ賢者の石は完成する」

黒い影を今まさに賢者の石へ入れた。

ピカッ！と光ると真っ赤な石がそこにあった。

「おお…これが賢者の石……素晴らしい魔力だ…これが混沌の成れ果て…！究極の魔法！」

「くっ！先に逃げるぞ！」

「フレイム！」

ライマーは呪文を唱え足の氷を溶かす。

「おい！何があったんだ！」

「分からない！ただ私たちとは別に侵入者が来たはずだ！」

「まさか、ユナたちか？」

ユリックに疑いの目を向ける。

「そ、そんな！着いてこないようにちゃんと言った！」

「まずいな、こっちに来ている」

ライマーはパソコンを覗いて言った、確かに熱反応であろう物がこちらに近づいている。

「私たちも逃げよ！賢者の石どころじゃあ！」

ドオン！

何かが爆発した、燃料室だろうか？だとするとマズイ気がする。

「ククク…逃がさない、俺の研究結果を君たちに見てもらおう」

そうだ、まだポリドリがいた。

「貴様が生きていることには驚きだが――また殺せばいいだけのこ

とよ！」

賢者の石は宙を舞い、ポリドリの中へと吸い込まれた。

「う、うおおお！！これが賢者の石……！」

ポリドリは無詠唱で指を振る、すると地面から巨大なゴーレムが現れた。

「ほう、この程度でここまでのゴーレムを作れるとはな！」

更にポリドリは呪文を唱える。

するとゴーレムはメッキを施したように輝き始めた。

「さあ、金属性魔法をかけたのゴーレム、潰すことは出来るかな？」

「おいおい、勝てるか？これは」

「…勝てるな」

意外な返答。

「奴は土と金の魔法を得意とする。金は燃やし尽くしてしまえば溶けてしまう、勝機はある、ただ――」

「ただ、なんだ？」

「あの島のこと、奴は槍を投げていただろ？あれは土属性の上級魔法『グングニル』。それを殆どの詠唱無し、それも連発して出すよ

うな奴と比べれば私はただの時間稼ぎだろう」

「いや、俺たちもやってやるさ」

「ええ、私だって」

「…お前らなあ、死ぬのが怖くないか」

「ああ、怖くない、一回死んだしな」

「吸血鬼はそう簡単には死なないわ」

「……言い残すことは終わったか、行くぞ！」

ゴーレムが拳を振り上げ叩きつける、咄嗟に避けたが衝撃が凄まじく吹き飛ばされる。

「フレイムアロー！」

すかさずライマーが火の矢を飛ばす。矢はゴーレムの外壁を溶かし、貫いた。

「やはり火には弱いか…いや！今は賢者の石がある！」

ポリドリは呪文を唱え始める。

「あのルーンは……水だ！」

「ウォーターボール！」

巨大な水の塊を投げ付ける、が輝也は剣を振る。

ズバツ！

風の刃は水の塊を二つに裂いた。

弾けた塊は雨を降らす。

「ふん、調子に乗るな！」

ポリドリは巨大な槍、グングニルを作り出す。

「死ねえええ！」

それを投げようとしたときだ、狼がポリドリの腕に噛み付く。

「く！吸血鬼か！？」

「へへっ、大当たり！」

元の姿に戻ると強烈な蹴りを入れる、流石は吸血鬼の力と言ったところか、吹き飛ばされ、ゴーレムに強く体を打ち付ける。

「やったか」

「…くく、くくく…！弱い！効かんぞ！」

ポリドリは立ち上がった、そしてゴーレムがライマーを掴む。

「なっ！」

「お前が一番厄介だ！握り潰せ！」

ゴーレムはライマーを掴む手に力を込める。

「あああああ！！！」

ギシギシと骨が軋む音になる、マズイ、と風の刃を腕に飛ばすが魔法で硬質化されたゴーレムには効かなかった。

「邪魔だ、燃えろ」

ボンッ！と大きな音がしたかと思うとゴーレムの上半身が無くなっていた。

ゆっくりと崩れていくゴーレム、ライマーを上手く受け止める、まだ息はある。

しかし誰がやったのか？崩れたゴーレムのほうへ目をやると三人の影が見えた。

「よう、久しぶりだな」

それはいつか見た友人の顔だった。

「圭也……！」

懐かしの友人の名を叫んだ。その横にはいつの日か襲ってきた覚とバートリーがいるではないか。

「お前たちもいるなんて意外だな」

「ああ、あのときの」

「……嬉しいようね」

心を読まれた、嘘はつけないな。

「まあいい、早くその魔女を連れて逃げろ、ここは崩れる」

友人との再会を祝いたいが仕方がない、逃げよう。

「…またどこかでな」

「ああ、またどこかで」

そういうとライマーを抱えて一目散に逃げた。辺りは暗くなっていが吸血鬼のユリツクは目が効く、このまま帰れそうだ。

「さて、あいつもいなくなった。渡してもらおうか、その賢者の石を」

「無駄だよ、圭也。奴は渡す気はないみたい」

覚はやれやれと首を振る。

「そうか、ま、それを悪用される前に倒すだけだがな！」

手のひらに生み出した光の玉を投げつける、それはポリドリに当たると強烈な熱を発生し爆発した。

「……なんてバカ力だ、だが力に振り回されている。と言った感じだな」

吹き上がるのは煙ではなく水蒸気、ポリドリは水の壁で光の玉を防いでいた。

ポリドリは指を振る。

「火、土。魔爆弾！」

土の塊が無数に投げられる、それは割れると炎を撒き散らした。

覚とバートリーは避けるが圭也は何ともない顔つきでポリドリに接近する。

「なっ」

「太陽にも及ばねえよ！こんな炎！八咫プロミネンス！」

体に炎を纏いアッパーを喰らわす。

上空に打ち上げられたポリドリに追い付き。

「八咫鳥キック！」

一瞬の内に三回の蹴りを与え地面へ叩きつける。

「まだまだあ！黒点蹴り！」

黒い炎を足に纏いポリドリに向かい突進する。

巻き上がる土煙。しかしポリドリは体を反らせ蹴りを避けていた。

「水、金。永久凍土のガラム！」

「グオオオオ！！！」

そこには体が氷で出来た狼がいた。

「土、火、金。不屈のスルト！」

黒い巨大なゴーレムが召喚され、圭也を襲う。

しかしポリドリは気づかなかった、足元の血溜まりに。

血溜まりは一気にバートリーへと姿を変えポリドリを拘束した。

「フッフ、ごめんなさいね？」

「不意打ちのつもりか？」

「！バートリー！離れて！初めから貴女が狙いよ！」

心を読んだ覚が呼び掛ける、が少し遅かった、燃える炎の剣、『レーヴァテイン』を持ったスルトがバートリー目掛けてレーヴァテイ

ンを降り下ろした。辺りに熱風が吹き荒れる。

「つてめええええ！」

拳をポリドリに叩きつけようとするがガラムが立ち塞がりガラムに拳をぶつける。するとそこから拳が凍り始めたではないか、すぐに手を引っ込め炎で氷を溶かす。

「諦めろ、貴様に勝ちはない！」

「スルトよ！」

覚がアドバイスを出す、その通りにスルトはレーヴァテインを圭也に叩きつけた。しかし覚のお陰で避けることが出来た。

そこに紅い霧が、視界が悪くなる。

（これは…バートリーか！？）

圭也は仲間が生きていることにホッとする、どうやら瞬時に霧に変身して避けていたようだ。

「小賢しい真似を…」

この霧じゃまともにゴーレムを動かせないようだ。

「見えないか？ああそうだな！俺も見えない！」

ほんとに見えん、バートリーは何を考えている。

「だがな！数撃っちゃ当たる！灼熱地獄！」

圭也は九人へと分身する。

「さあ、九つの偽の太陽。お前には射ぬけまい！」

それぞれの圭也は炎を纏いポリドリに突っ込む。

「風、火」

ゴウ！

熱風は霧を吹き飛ばす。露になった九人の圭也に容赦なくガラムとスルトは攻撃する。

「甘いわ！風魔法は俺の得意——」

「甘いのは貴方よ」

ポリドリの背後で霧が集まり、バートリーへと変わる。バートリーはポリドリの背中に腕を突き出す。

「ガハッ！」

口から血を吐く、そして賢者の石がポリドリから出てきた。

「今よ！」

圭也が賢者の石に手を伸ばす。

「させるかぁ！」

ポリドリも手を伸ばす、そしてポリドリが石を取った。

「遅かったなあ、残念だったなあ」

「くそっ…！」

「フハハハ！まあいい、死ね」

地面に伏せた圭也に魔法を唱えようとする。

「死ぬのはテメエだな！」

「なに！？」

ポリドリが言うのと手に持った石が光ったのが同時だった。

石は爆発、ポリドリの注意が石に向いている内に圭也たちは逃げ出した。

「いや、終わったな」

「ええ、なんとかね」

「楽しかったみたいだけどね」

圭也、バートリー、覚は煤まみれになりながら海岸に佇んでいた。圭也の手には賢者の石が握られている。

「それ、どうするの？」

「ん？ああ、いらねえし使い道もねえ、輝也にやるのもいいがあいつが狙われたら迷惑だし――」

と言いながら石を海へ投げ捨てた。

「あーあ、金になりそうだったんだけどねえ」

「一文にもならねーよあんなもん」

「さ、帰りましょ。家が心配だわ」

「警備に《つるべ落とし》を配置してるから大丈夫だと思うよ」

「覚、いつも思うがどこから妖怪を連れてきてるんだ」

「ないしょ」

手に指を当てて言った。

「分かったよ」

「今、少し可愛いと思ったでしょ？」

「なっ……お前……心を読むってセコいわ、恥ずかしいわ……」

圭也は顔を赤くして言った。

――

「おかえり、どこ行ってたの？」

ユナは傷だらけの輝也を見て驚いた様子だった。

「いや、ちょっとドンパチしてきただけだ」

「ふうん？でも、無理はしないでね？」

「ああ、分かってるつもりさ。さあ飯にするか」

台所へ向かう輝也。

「……なんか嬉しそう」

「ちょっとね、昔の友人に会ったのよ」

ユリックが説明する、それで分かった、圭也だろう、まさか生きていたとは。

圭也は賢者の石を捨てた。それはあらゆる混沌を集めた石だとは知らずに。

『二十三章 吸血鬼と魔法・後編』（後書き）

余りにも長くなったので分けました、というかこの作品を読んでいる人はいるのかと不安になった。

誤字脱字など、感想レビューを待ってます。

相変わらずのよく分からない文章ですが努力はします。

キャラ紹介

名前…シェリダン

性別…♂

種族…魔術師

吸血鬼に興味を持ちユナを拐った人物、何をしようとしていたかは不明、あっさり倒される、が帰る頃にはシェリダンの姿は無かった。

名前の元は小説『吸血鬼カーミラ』の著者、シェリダン・レ・ファニュから

名前…ネラプシ

性別…♀

種族…吸血鬼

対バートリーに呼ばれた用心棒的存在、やんちゃな性格だが咲也の前ではネコらしい。ユナの前ではタチになる。浮気しがちだがなんやかんやで咲也にべったりなようだ。

元ネタは東ヨーロッパ内陸部にあるスロバキア共和国のゼンプリンに伝わる吸血鬼。血も吸うが危険なのは目、睨んだだけで人間を殺すことが出来る、しかし睨む必要もなく、高い所から街を見下ろせば街にいる人々を全員殺すことが出来てしまう。

『二十四章 吸血鬼と災難・前編』

ある日の午後、部屋の本棚を見ていると買い覚えがない本を見つけた。

「何々？ 『ヴァンパイアキッス』？ うーん、買ったっけなあ」

覚えがない、それもそう。この本はユナが買ったものだからだ。

そこに、キィと小さな音を立ててユナが入ってくる。忍び足で部屋に一步踏み入れるが目の前に輝也がいて硬直した。しかも手には隠して置いた本を持っている。

「わ、わああああ！？」

ユナは慌てて本を奪い取ると恥ずかしさから顔を赤くして俯く。

「なんだ、ユナのか…って…」

あの表紙、吸血鬼の女の子がキスをしていたな、ユナもこう言うの好きなのか。

「べ、別に好きじゃ…」

心を読まれた、しかし分かりやすい照れ隠し、興味程度はあったようだ。

「ハハハ、気にするな。周りにもっと濃いやつがいるからな」

咲也とネラプシとユリックとかな！目の前でキスとかするなよ、目の保養になりまくるじゃないか。

「サークル名は『カエデ』か…あまり知らないな。買ったことあったかな」

と本棚を探る、が無かった、しかし吸血鬼の百合モノを描いているとなると買わざる終えないな。

ピンポーン

チャイムが鳴ったので玄関に出てみると楓花がいた、どうしたのか。

「なんだ、何かあったか？」

「ん、その、ユリックに会いに」

「ああ、そうか。お熱いことで」

最後は皮肉を込めて言った、吸血鬼×魔女もアリっちゃアリだ。

俺もユナと何処かに出掛けるか。と二階へ上がる楓花を見て思った、二人の時間を邪魔したくはない。

「なあ、ユナ——」

と自分の部屋を開けるとユナがいた、妙に顔を高揚させて。

「どうした？風邪か？」

手には俺の同人誌が握られている。

「な、何でもないよっ！ちょっと興奮して……」

とユナはバツが悪そうな顔をする。

「そっか、なあ、どっか出掛けないか？」

「う、うん」

と言うわけで日傘を持たせて外へ出た。

それから少し歩き、人通りが増え始めた頃。

私は輝也と外を歩いている、これは端から見ればその、いわゆるデートでは？そう考えるとユナは顔を真っ赤にさせた。

「どうした？やっぱ風邪か？」

彼の顔が近い、その健康な肌に牙を突き立てて血を……それはダメ、私は人に近い生き方を……でも……

「なあ、ユナ。どこいく？」

「えっ？ああ！うーん……」

突然に聞かれたので戸惑う、何処へ行こうか。

「んー遊園地にするか？」

遊園地、確か私が住んでいた所にもあった。夜には閉まっていた行くことは出来なかったが。

「うん、行く」

自然と笑みが溢れる、嬉しいのだろう。私は微笑みながら彼の腕に体を預けた。驚いた様子だったが僅かに顔を赤らめ遊園地まで歩を進める。

入場券を購入し中へ入る、小さな遊園地だが人は多い、大半はカップルだ。一人だと居心地が悪いだろう。

「何に乗るか？」

キョロキョロと辺りを見渡す輝也を他所に私は先に進んでいた、余程楽しみだったのか自然と足が進んでいた。

キラキラとした装飾が施された風船、轟音と共に聞こえる悲鳴、これは噂に聞くジェットコースターではないか。

「これがいい！」

と振り替えるとそこに輝也の姿はない。しまった、迷子だ。ユナはすぐに来た道に戻るが人混みに押し流され上手くいかない。

「あ…」

人混みに押され傘まで落とす、日の光がユナを直撃する。焼けつくような痛みが走り、ユナはすぐに屋根の下へと避難した。

「はあ…」

取り合えず安心、だがどうしよう、これでは身動きが取れない、日が暮れるまで待つという手もあるが流石にそれは避けたい。

「輝也…」

私は彼の名を呟いた、彼が見つけるのを祈ろう。

「つたく、どこ行きやがった」

輝也はユナを探していた、突然いなくなるしユナの傘を見つけたのだ。今ユナは動くことが出来ないか灰にでもなっているだろう。

「くそっ、何処にもいやしねえ」

人混みで思うようには探しに行けない。

「迷子センターにでも、いや日の下は歩けないから無駄か」

参ったな、探すしかなさそうだ。

「しかし——どこに…ん？」

お土産屋の裏路地へ入っていくユナを見た。

「なんだ、いるじゃないか」

ユナを追いかけられるように路地へ入る。小さい遊園地なのかあまり掃除が行き届いていないようだ、お菓子の袋などが散乱している。

そこの突き当たりにユナはいた。

「よかった、心配したぞ」

と肩に手を置こうとしたときだ。ゾクリと嫌な殺気がユナから放たれた。

バツと飛び退き輝也は構える。

「何者だテメエ！」

腰に付けた剣に手を掛ける、いつもはキーホルダーのようになるので一応付けている。

「貴方：輝也ですね？」

後ろを向いていたユナが振り返る、それはユナではなく、ユナの服を着た別の誰かだった。

「ああ、そうだ。なんのようだ？」

輝也はその少女を睨む。少女がパチンと指を鳴らすとドロリと溶けるように服が崩れ、銀髪に青の目をした少女に変わった。

「初めまして、私はヘルシング、《ダージリン・S・ヘルシング》

と申し上げます」

「なげえ名前だな、でヘルシング。見たところ敵意はねえみたいだがなんだ？」

「貴方に私たちの団体へ来てもらいたいのです」

ヘルシングは淡々と述べた、勿論答えはノーだ。その意思を表すため剣を構える。

「やはりそうですか、想定範囲内です。では無理矢理にでも連れていきますか」

言い終わると同時にヘルシングはナイフでこちらに攻撃していた。

キン！

辺りに金属音が鳴り響く、剣で弾いたがマズイ、路地裏とは言えあまり目立ちたくはない。

「風属性の魔道具…やはり貴方はこちら側にいるべきです」

「こちら側だがあっち側だが知らねえが怪しい団体に入るつもりはねえ！」

剣を振る、風の刃はヘルシングに向かって放たれるがヘルシングは跳び、刃を避けた。刃は壁を削り突き当たりになお壁を切り裂いていく。

「…それは人間が簡単に魔法で戦うために作られた兵器。しかしこ

れ程の威力は…やはり貴方はこちら側…」

「訳の分からねえことを言ってるじゃねえ！」

剣を思いきり叩きつけるがヒラリと軽く避けられる。

辺りは暗くなってきた、日が暮れ始めた。

「ああ、日が暮れ始めましたね、吸血鬼が貴方を探すことも可能になりましたね」

「輝……也…？」

知っていたかのようにそこにユナが現れる。

「ユナ！来るな！」

隙を見せてしまった、その隙にヘルシングは首の後ろを叩く。まさかこんな漫画みたいなことをされるとは……輝也の無念を虚しく視界が暗転していく。

ガクリと崩れる輝也をヘルシングは受け止める。

「輝也の捕獲完了、ただちに帰還します」

「待って！貴女！輝也をどうするつもり！」

「こちらヘルシング、吸血鬼と接触、戦闘の許可を待ちます——了解、帰還を優先します」

ヘルシングはひょいと身軽にジャンプするとどこかへ跳んでいった。

「て、輝也！」

ユナは急いでその跡を追う、吸血鬼の身体能力なら十分間に合うだろう。

遊園地の塀を飛び越え、民家の屋根を跳び少女の姿を見つけた。ユナは必死に追い付こうと速度を上げる。

ヘルシングは振り返るとナイフを何本か投げつける。ユナは避ける、そして顔を上げたときにはすでに少女の姿はなかった。見失った、ユナは辺りを散策するが見つからない。

「輝也…どうしよう…」

その時、咲也の顔が頭に浮かぶ、そうだ、咲也なら何か知っているかもしれない。ユナは咲也の家へ向かった。

そして咲也の家に着いたユナはチャイムを鳴らす。

（お願い…出て！）

間もなくして咲也が現れる。

「あ、あ、あの！て、輝也が！」

上手く言えないがその挙動からただ事ではないと判断した咲也は話

を聞く。

「なるほど、何かあったのね、取り合えずそこへ連れてってちょうだい」

ユナは頷き屋根に飛び乗り、さっさと少女を見失った場所まで向かった。咲也は猫のように足音を立てずそのあとに着いていく。

そして、例の少女を見失った場所に着いたが何も手掛かりになりそうな物はない。

「で、輝也がどうしたの？」

「輝也が拐われたの！」

「拐われた！？どんな奴に！」

「私と同じ服を着た女の子だった」

「それだけじゃあね……」

「あ、これ……」

とユナは投げてきたナイフを見せる。

「……この柄……ヴァンパイアハンターの物ね」

魔除けの銀で出来た柄のナイフを咲也は見て言う。何故ヴァンパイアハンターが？それもどうしてユナより輝也を拐ったのか。

「この国までヴァンパイアハンターが来ていたなんてね…」

「ヴァンパイアハンター！？どこにいるか分かる？」

ユナは咲也に詰め寄る。

「さ、さあ。流石に居場所だけは知らないわ」

勢いに戸惑いながらも答えた。

（教えたりなんかしたらこの娘、一人で行きそうね。それだけは避けないと）

「……俺は知っているぞ」

「…最悪のタイミングね」

咲也は「なんてこと」と頭を抱える。屋根の上から圭也が降りてきた。

「知ってる！？本当に！？」

「ああ、偶然な。友人が連れていかれるもんだから見ていたんだ」

「あんたねえ！ユナをそんな危険な所へ連れていく気！？」

「本人が行きたいなら仕方ないだろう。俺とて友人を助きたい！仲間が多いほうがいいからな！」

グッと拳を握り締める。

「はあ、分かったわ、行きなさい。ただ、死なないでね？ ユナ」

「俺は？」

「あんたは殺しても死にそうにはなさそう」

「それもそうだな！ ハッハッハッー！」

と大笑いする圭也。

「さ、行こう！ こっちだ！」

圭也は屋根に飛び乗り、移動を始める。ユナもそれに続く、咲也は溜め息を吐き、自宅へと帰っていった。

『二十四章 吸血鬼と災難・前編』（後書き）

はい、また前編です。長くなっちゃうんです何か書くと。そのわりに他の話はえらく短かったり安定しませんね。

感想や誤字の報告待ってます！

◇キャラ紹介？元ネタ解説？

名前.. 鶴野清香

性別.. ♀

種族.. 巫女

別小説、高天原物語の主人公。正直あっちの話は失敗。かといって突然戻ってくるのも不自然だということで戻るに回せない可哀想とつか正直無かったことにしたいキャラ。高天原物語の続きを書けばいい話んだけどね。

名前.. バートリー

性別.. ♀

種族.. 吸血鬼

血を求めユナを拐った人物。血を操りドレスのように身に纏ったり針のように硬化させ相手を貫いたりする。血には拘りがあり、処女の血しか飲まない。現在は圭也という。

元ネタは実在した人物『エリザベート・バートリー』から。血の伯

爵夫人と恐れられ、年端もいかない少女を殺しその血を美容の為、肌に塗ったり飲んだりしていた。その数は600人を超える。

名前…覚

性別…♀

種族…妖怪（覚）

高天原へ行こうとした輝也を妨害した妖怪。人の心を見透かす妖怪。現在は圭也のところで過ごしている、妖怪との顔が広いよう。

元は岐阜などに住む妖怪の『覚』。木こりの元に現れて心を見透かすが特に無害で共存していたとも言われている。中には心を取ってしまう者もいるらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1879v/>

俺と吸血鬼の非日常

2011年12月13日01時05分発行